

---

# 爆弾的娘

金島 宗治

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

爆弾的娘

### 【Nコード】

N4935S

### 【作者名】

金島 宗治

### 【あらすじ】

「鎮守が森学園宝船高等学校」の生徒で化学オタクの桃子、がさつなピアノ弾きの鍵司、そしてスポーツ万能の駿平の三人は自らが通うこの学校の陰謀を嗅ぎつける。次々に起こる怪しい出来事に調査を始めた彼らだったが・・・。

## 序 事件『李下不正冠』

梅雨明け前だというのに放課後の音楽室は西陽が容赦なく窓から差し込んで、異様に暑苦しかった。鍵司はピアノを弾く手を止めて乱暴に鍵盤にはおづえをついた。衝撃的な不協和音が室内に響いた。

「わからねえ。なんでこんなところにこんな弾きにくいパツセージがあるのかわからねえ。」

吐き捨てるようにつぶやいた彼はそれからおもむろに譜面を閉じて、乱暴にピアノの蓋を閉めた。

「ったくシューマンてやつあ、自分がピアニストを挫折したからって、妙な曲ばかり作りやがる。もつと素直になれなかったのかね。」

「どごーん！」

その時、校舎のどこかで鈍い爆発音が聞こえた。音楽室の開きの悪い窓のガラスも少しビリビリと鳴った。

「ん？」立ち上がった鍵司は今まで弾いていたR・シューマンの楽譜をわしづかみにすると音楽室を飛び出した。「また桃子のやつ……」

ぶつくさ言いながら彼は急いで階段を降りると二階にある化学実験室に向かった。

「鍵司！」彼の背後から声がした。

「よお、駿平。」

「聞いたか？今の音。」関西なまりの駿平は、鍵司に追いついて並んで駆け出した。

「ああ。」鍵司はため息混じりに返した。

「ピーチ姫やるか？」

「間違いいえな。こんな時間に化学実験室なんかにもってるのはあの娘ぐらいだ。」

「いつもよりすごい音やったで。」

「また何か壊したに違いねえな。」

廊下まで煙が充満していた。化学実験室のドアを開けるなり駿平は叫んだ「ピーチ姫！」返事はない。「ピーチ姫！どないしたんや！」

「おい、桃子！」鍵司も室内に飛び込むと口を押さえてせき込みながら叫んだ。「どこだ！桃子！」

「待つて！今来ると危険よ！キー坊も駿ちゃんも廊下に出て！」姿なき声が白い煙の奥から聞こえた。

「桃子！」

「どこや！ピーチ姫！」

煙をかき分けて、突然二人の男の前に現れ、彼らの腕を強引に掴んで、無理やり廊下に引つ張り出したのは小柄な愛らしいシヨートカットの女子生徒だった。なぜかレンズのないメガネをかけている。「早く閉めて！」桃子は鍵司に命令した。ほとんど条件反射的に鍵司は実験室のドアを閉めた。その直後、

どごーん！

再び爆発音がして、あたりが揺れた。駿平はそのドアの隙間からフラッシュする光を見た。

「あかん、煙にやられるで！」駿平が叫んだ。三人は慌てて階段を駆け降りた。

「で、今回は何なんだ？」鍵司が腰に手を当てて詰問した。

「そんな怖い顔で見なくてもいいじゃない。実験よ、実験。」桃子は黒くすす汚れた顔を引きつらせた。そして焼け焦げて縮れた前髪を手でかき上げた。

「危険な実験はやめとき、ピーチ姫。俺も鍵司も心配なんや。」

「けっ！」鍵司が言った。「俺は桃子の心配なんかしてねえ。ただ学校壊されちゃたまらねえからこうやって・・・」

じゃぶじゃぶ。桃子は必要以上に蛇口をひねって滝のように水道

の水を出しながら顔を洗った。

「ほら。」鍵司はほとんど無意識にハンカチを桃子に手渡した。

「何とかいいながら、鍵司はピーチ姫には優しいんやから。」駿平は微笑んだ。

「ありがと、キー坊。いつものようにちゃんと洗濯して返すからね。」

「当たり前だ。」

「で？」駿平が促すと、桃子は臆せずに話し始めた。

「実験をやってたのよ。」

「それはさつき聞いた。俺たちが聞きたいのは、おまえが自分のメガネのレンズをふつとばすほどの実験ってのは、いったい何だったんだ、ということなんだよ。」

「怒らない？」桃子は上目づかいで鍵司と駿平を見た。

「怒れへん、怒れへんて。」

「言ってみろよ。」鍵司は腕組みをした。

「黒色火薬の実験してたのよ。」

「火薬だと！」鍵司が大声を出した。「と、とんでもねえ娘だ！」

「や、やっぱり怒ったじゃない！」桃子は駿平の背後に身を隠した。

「俺は怒らないなんて言ってねえ。」鍵司はまくしたてた。「だいたいな、おまえ去年も爆薬の実験だとか言ってニトログリセリンを化学実験室で爆発させただろうが！あん時は俺まで校長から絞られたんだぞ！関係ない俺までな！」

「まあまあ、鍵司、落ち着きや。ピーチ姫も反省しとる。」

「そ、反省してるわ。」

「何言ってるんだ。桃子っ！おまえ何度学校を破壊すれば気がすむんだ、え？」

「破壊だなんて・・・まだ2度目じゃない。」

「・・・・・・！」鍵司は言葉をなくして拳を震わせた。

「ええやないか、だれもけがしたわけやないし、ここまでやらな

あかん何か深い訳があつたはずや。な？そうやる？ピーチ姫。」

「駿ちゃんてなんてやさしいの．．．キー坊も少しは見習いなさいよ。いつもぶりぶり怒ってばかり。」

「その深い訳を聞かせてもらおうかしら？その少年たち。」いつものまにか彼らに忍び寄っていたのは、白衣をまとった化学の教師、玄海鮫子だった。

「あ、玄海先生．．．」

「鮫子先生、俺は関係ないんです！それからこの駿平も。」鍵司はあわてて駿平の腕を引き寄せた。

「いいから三人ともいらっしやい。校長室へよ。わかった？」

「覚えてるよ！桃子。」鍵司は低くつぶやいた。桃子は聞こえないふりをしてさっさと歩き出した。

町のほぼ中心にある小高い丘の上にこの『鎮守が森学園宝船高等学校』の校舎は建っていた。ナリは極めて独創的で奇抜なデザインで、どこに何の教室があるのか、外から見ただけではわからないような建物だった。中に入るともつと複雑で、新入生が目的の教室に行くためには、見取図を手に持ち、一度行ったことのある場所をこまめにマッピングしておかないと確実に迷ってしまうて授業に遅刻するといった、ほとんどRPGばりの設定で造られているのだった。うっそうとした森を切り開いてグラウンドも造られており、いわゆる深い森の中の静かな環境のもとで学習できる素晴らしい高校だった。校長は権堂力造<sup>こんどうりきぞう</sup>。小太りで少し髪の毛の薄い、どこにでもいそうな初老のおじさんだった。ただこのおじさん、一級建築士の資格を持っていらっしゃるらしく、この複雑怪奇極まりない校舎も彼が設計したという噂だった。

そして最近この高校は、どこからそんな自信が湧き出すのか知らないが、大学進学率アップを前面に打ち出した大々的なピールを執拗に進めていた。それは世の、教育に熱心な、というよりわが子にだけは一流の大学への進学　一流企業への就職というレールを

ひた走つてほしいという親たちにおおいにウケて、近年ここを受験する生徒は増加の一途をたどっていた。だから入学試験は年々難しくなつていくのだった。そういう学校の実績よりも宣伝に乗せられた、実に非科学的な根拠にも関わらず、受験者数の増加という単純な現象によつて、この地域の宝船高校に対する社会的な教育的評価は年々高くなつていっているのだった。

梅雨明け前だというのに放課後の音楽室は、まだ西陽が容赦なく窓から差し込んでいて、異様に暑苦しかった。

「いやあ、絞られたな。」駿平が額の汗を拭いながら言った。「それにしても、どうにかごまかせたようやな。ピーチ姫。」

「教師なんてだますの簡単よ。」

「おまえのウソ泣きに騙されないのは俺と駿平だけだよ。」

「ええなあ、かわいいいつてだけで教師騙せるんやから。」

「校長も相当情状酌量してたもんな。」

「ふふ、私の美貌に敵はいませんわよ。おほほほ」

「何がおほほほだ。」鍵司はあきれた。「で、本当のところはどうなんだ？桃子。」鍵司はピアノの椅子に座つたままで言った。そのピアノにもたれかかるといふようにして桃子は口を開いた。

「3年越しの私の夢だったのよ。」

「化学室を煙で充満させるのがか？」

「違うわよ。」

「黒色火薬の実験か？」

「そう。」桃子は窓に歩み寄ると眼下に広がる深い森の青々とした木々を眺めながら続けた。「私、おじいちゃんの家で床下で硝石を作つてたのよ。」

「硝石だと？」

「そ。硝石と硫黄と木炭の粉を混ぜると黒色火薬ができるのよ。」

「その硝石をなんでおまえのじいさんの家で作らなきゃならねえんだ？」

「おじいちゃんの家は農家だから床が高くってね、床下の湿り気が

硝酸バクテリアの活動に都合がいいのよ。」

「ちよつと待て。おまえにじいさんなんかいたか？」

「血はつながってないけどね。パパがお世話になつた人なのよ。」

「とどのつまりは他人のじいさんてわけだな。」

「硝酸バクテリアって・・・硝石を作るバクテリアか？」駿平がたずねた。

「その通りよ。床下に馬フンや糞くずを積み上げておくと、硝酸バクテリアや亜硝酸バクテリアが硝石を作ってくれるの。」

「おまえ、親戚でもない他人のじいさん家の床下を爆発物製造の秘密基地にしたわけなんだな？」

桃子は振り返った。「硝石は爆薬じゃないわ。」

「原料には違いないだろうが。」

「それで？」駿平が仲だちした。

「仕込んだのが中学校2年生の時。」

「何だと？」

「私、決めてたの。」

「それを使って3年後に黒色火薬を作るってか？」

「ピンポーン！」

「あほか。つまらんもんに夢託しやがって。」

「失礼ね、キー坊にはわからないの？化学者の気持ちが。」

「ああ、わからんね。」

「自分の手で物を造り上げる喜びよ。キー坊だってピアノ弾きなんだからわかるはずよ。」

「ピアノストとテロリストを一緒にするんじゃないやねえ。」

「それで硝石は手にはいったわけやけど、硫黄はどないして・・・

「先月家族と温泉旅行したときに硫化水素の噴気口から採取したわ。」

「ご苦労なこつて・・・」鍵司は頭をかかえた。

「ここ一週間は硝石の結晶を精製したり、配合の割合を研究

したりしてたのよ。キー坊が思っているほど遊んでたわけじゃないわ。」

「遊んでたとは言ってるねえ。おまえが学校テロ活動を企んでたんじゃないか、って心配してただけだ。」

「そんな悪人じゃないわよ。私。」

「わかった。認めてやるよ。」鍵司は左手をひらひらさせた。

「それでね、ちよつと混ぜる時に力が入り過ぎちゃって……」

「爆発したってわけだな。」

「そ。おまけにその近くに調査しかけの残りの火薬を山のように積んでたのよね。これが。」

「二度目の爆発はそれか……。」

少し悲しそうに桃子はうつむいた。「3年の努力もあの瞬間に燃えてなくなっちゃった……。」

「燃えたんじゃないだろ？爆発だろ？」意地悪く鍵司はたたみかけた。

「そない、いじめんでもええやないか、鍵司。ピーチ姫かわいそうや。」

「だから、」桃子は顔を上げて強調した。「あれは事故なの、事故。」

「わざとやられてたまるかよ。」

少しの沈黙の後、桃子は鍵司の横に立った。「ねえキー坊、あれ弾いて。」

「何だよ。」

「あれ。ほら、『春のざわめき』。」

「それを言うなら『春のさざめき』だ。」

「そうそう、それ。」

「春がざわめいてたまるか。不気味じゃねえか。」

「ピーチ姫のお気に入りやったな。そういえば。」

「気分じゃねえなあ……」鍵司は弾きしぶった。

「ねえ、お願い。」

「わかったよ。邪魔するなよ。」

鍵司は前触れもなく静かにクリステイアン・シンディングの作曲したピアノ曲『春のさざめき』を弾き始めた。

今まで吹かなかったそよ風が、不意にその爽やかで軽やかな音楽を優しく包み込みながら通り過ぎた。そして数分後、最後の音が柔らかに音楽室の壁にとけ込んだ。

「いつ聞いてもうまいな、鍵司。」駿平が手をたたいた。

「なんであんなみたいながさつな男に、こんな繊細な才能があるのかしらね。不可解極まりないわ。」

「おまえな、人にピアノ弾けつて言つときながら、なんだその言いぐさは。」

「ごめんごめん。」

「桃子は知らねえんだよ。俺はな、基本的にはデリケートで情緒豊かでナイーブな男だぜ。」

「とてもそうとは思えんな。」駿平が言い放った。

「やろう、駿平までそんなこと・・・。」

「おまえがピアノ弾きやなんて、誰にも想像できへんで。」

「そ。いわば全く芸術とは反対の世界にいる男にしか見えないわね。」

「言ってる。」鍵司は静かにピアノの蓋を閉めた。「そろそろ帰ろうぜ。」

「そうやな。もうこないな時間や。」

「玄海先生、あの娘、化学部の次期部長というのは本当かね？」

よせばいいのに薄くなった自分の髪の毛をなでまわしながら権堂校長は言った。

「ええ。なかなかの俊才ですわよ。」

「彼女の名字の『楊』とは、ちよつと変わつておるが・・・」

ソファに向かい合つて座っていた教頭が口を開いた。「校長先生はご存じなかつたんですね。ほら、この学校の理事もやっているあ

の楊建設の、」

「なに？あの富豪の娘か！」権堂校長は急に不自然な腰の浮かせ方をした。教頭の横に立っていた玄海鮫子は、その校長の驚き様に不可解な顔をした。

「どうかしましたか？権堂校長。」

「ということは・・・さっきの娘も・・・中国人なのだな？」

「国籍は日本ですがね。」教頭はさして興味もなさそうにぼそぼそと言った。「確かに両親は中国人ですなあ。親父はなかなか豪快で世話好きな男で、」

教頭の言葉を遮って校長は厳しい顔で言った。「すまんが教頭先生、席を外してもらえんかね。」

「はあ？」当然のことながら、教頭は意表を突かれたような表情で立ち上がった。

「玄海先生と話がしたいのだよ。」

なぜこの学校のナンバー2である自分ではなく、この一介の化学の女性教師と話したがるのか、という一種不穏な心情を眉間のしわに忍ばせて、その背の高い教頭は校長室をしぶしぶ出て行った。

権堂は身を乗り出した。今まで教頭が座っていたソファに腰を下ろした玄海鮫子は手の指を組んで次に出て来る校長からの言葉を待った。校長室に少し不穏な空気が漂い始めた。

「きゃー！駿平ー！」

女子生徒の黄色い声援が飛んでいる。駿平はパスされたボールを捕ると、ドリブルしながら目にも止まらぬすばやさで敵の間をすり抜け、そのままほとんどリングに手が届くほどのジャンプをしてゴールを決めた。見守っていた数十人の女性生徒がまた黄色い声を体育館の中に渦巻かせた。

「あの4番に何ゴール決められた？」敵のサングラスの監督の教師が隣に座ったスコアラーに憮然とした表情でたずねた。

「はい、えーと・・・」

「どうした。」

「スコアブック一回分に入りきれないんで……。ちょっと待って下さい、今数えてますから。」その小柄な男子生徒はページをめくりながら指を折り始めた。

「もついい。」教師は脚と腕を組んだままつぶやいた。「それより、時間は。」

「えーっと……あと10分ぐらいですかね。」

「まだ残りそんなにあるのか!」

「僕に当たってもしょうがないですよ、監督。」

「ふんっ!」

また駿平のゴールが決まった。体育館の中はまっ黄色である。

「今ので38ゴール目です。監督。」

「こんなこと練習試合するなんて言わなきゃよかった。」

「でも、たかが練習試合にずいぶん応援が多くありません?このがつこ。あ、またカットされちゃった。」

「4番はヒーローらしいな。」

「有名ですよ監督、あの速水駿平ってやつ。」

「ええい!そのくらい知つとる!名前を口にするな、忌々しい!」

「こりゃ完全にだめだな。うちのメンバーすっかり戦意喪失してる。ファールする余裕もない。」

「まだか、時間は!」

「あと6分もありますよ。監督。あ、こんだ3ポイントゴールだ。」スコアラーはまたスコアの新しいページをめくった。

「駿ちゃんほどのかつこいい男の子なら、」桃子がうす汚れた、

不釣合いにサイズの大きい白衣の腕をまくって試験管を手を取った。「交際を申し込む女の子も多いのも納得できるわね。」

「そんなに多いのか?」

「そりゃあ、もう。」桃子は手に持った試験管から透明な液体をビーカーに注ぎ入れようとした手をとめて、鍵司の方を向き直って

言った。「この学校だけじゃなくて近隣の高校、ひいては中学校にまで彼のファンがいるって話しよ。」

「へえ。すごいんだな駿平。」

「試合破りの駿平ってね。あらゆるスポーツをマスターしてて、彼の出場する試合には優勝以外考えられないって地元新聞も絶賛してる。去年の冬はサッカーで超人的な超ロングゴールを決めてチームを優勝させたし、今年になってからは町のトライアスロン大会に出場して2位との差を13分半もつけて堂々優勝。」そう言いながら桃子は試験管の液体をビーカーに注いだ。「もっとも、トライアスロン出場者のほとんどはリタイアして、ゴールしたのは3人だけだったけどね。」

ぐつぐつ。ビーカーの中の液体が沸騰し始めた。

「おい、ビーカーから白煙が上がってるぞ。」鍵司はあとずさりした。

「どだい無理なのよ。こんな小さな町で町民トライアスロン大会なんかやるの。駿ちゃんに、どうぞ優勝して下さい、って言ってるようなもんだわ。」

「だ、だから、ビーカーが沸騰してるって！」

「大丈夫よ。これ王水だから。」

「なにが大丈夫だ。王水つつたら金さえ溶かす強酸じゃねえか。」

「あら、よく知ってるわね、鍵司くん。化学の勉強もしてるのね。感心だわ。」

「そ、そんなもん、ちやちなビーカーで作るんじゃない！」

「大丈夫だって。ほんとに心配症ね、キー坊ったら。」

びししっ！

その時、そのちやちなビーカーにヒビが入り、中の液体が水柱を上げながら騒ぎ始めた。

「変ねえ……。」逃げようともせず桃子はビーカーを見つめている。

ガチャン。じゅわわー！

ピーカーは割れ、中の液体が木製の実験台にこぼれ、湯気を上げだした。

「おい、桃子！」鍵司が叫んだ。

「あれ？これ・・・」

「き、強酸が・・・」鍵司は壁に張り付いている。

そばにあった薬品瓶のラベルを見つめていた桃子は、おもむろに鍵司の方を向き直った。顔が少し引きつっている。

「ど、どうしたんだ？」鍵司がおそるおそる聞いた。

「キー坊、安心して。」

「何が安心してだ。机が焦げてるぞ！」

「間違つて蒸留水入れちゃったのよ。」

「蒸留水だあ？！ピーカーには何が入ってたんだ？」

「こつちはちゃんとした濃塩酸。」

「沸騰するはずだわな。あんなにどぼどぼ入れたんじゃ。」

「いつものことよ。気にしないで。」

「弁償しろよ。先生に言つてな。」

「おかしいと思ったのよ。酸どつしを混ぜてもこんなに騒ぐはずないもん。」

腰に手をあてて、ため息をつきながら桃子はうなづいた。

「いいから、早く片付けろよ！」

「会長、」青白い痩せた男子生徒が机をはさんで向かいに座っている大柄な女子生徒に話しかけた。

「何よ。」にこりとませず、その女は返した。

「計画はうまくいきますかね。」陰気な声で生徒会副会長の青木草男はぼそぼそ言った。

「あんたは私の言うとおりにしていればいいんだよ。それよりあんた、他の誰にもこのこと気づかれてないだろうね。」会長の権堂妖子は不吉な視線を前に座った気の弱そうな男に投げた。

「と、とと、とんでもない！」青木は思わずのけぞった拍子に椅子ごと後ろにひっくり返った。どんがらがつしゃん！丁度そこにあつたバケツに入っていたかび臭い水もついでにぶちまけてしまった。「いて、いててて・・・。」

権堂はのっそりと立ち上がると、無表情に言った。「雑巾がけ、ちゃんとしておくんだよ。」そして左手に持っていた金色のコインをピン、と弾いて再び手の中に納めると、青木をまたいで、あたりの壁を揺るがすほどの足取りで生徒会室を出て行った。

「いつ見てもビュレフオだねえ、楊くん。」いやらしい話し方で生徒の評判のすこぶる悪い現代社会の教師土井は桃子の机の横に教科書を持ったまま立って、遠慮なくいやらしい口調で言った。

「あつちへ行って下さい。」がたがた。桃子は身体を椅子といっしょに土井から離し、負けずに遠慮なく嫌な顔をした。

「まあたまた、相変わらずお堅いガールだ。君ほどのプリティなスチューデントなら、恋人の一人や二人、いるんだらうねえ。どうかね、ミーでよければあなたの愛人になってもよろしいですよお。」

おぞぞぞ！桃子は身の毛がよだつ思いだった。土井は構わず続けた。「誰ですか？君のこれは。」左手の親指を立てて、その異常に目の小さい中年教師は桃子に迫った。

ぱかん！「やめるよ、変態教師。」いつの間にか桃子の横に鍵司が立っていた。手にはアルトリコーダーを持っている。

「痛いじゃないか。君。」殴られた相手を見た土井は驚いて聞き返した。「き、君は隣のクラスの小川鍵司！なぜ君がこの教室にいるんだね。今何の時間だと思ってるのかね。」

「その台詞、そのままそっくりでめえにお返しするよ。」

「な、なんですと！ははあん、君が楊くんのダーリンですね？さては。」

ぱかん！

「い、痛い。」

「これ以上殴られたくなかったら出て行け。授業はとづくに終わってら。」

「何ですって？授業がもう終わっている？そんな馬鹿な。」

教室の生徒のほとんどは、この教師に関わり合いたくなくて授業終了のベルとともに出て行ってしまふ。教室に残っているのはまさに本人と桃子と鍵司だけだった。

「な、なんということ・・・」

「わかったか。さっさと出て行け！」鍵司は桃子の手を引いて教室を出た。

「まったく見てられないね。」

「そんなことおっしゃっても・・・」

「あんな接近の仕方じゃ嫌われはしても好かれはしないわね、絶対。」

「ミーのこの魅力をもつてすれば、どんな女子生徒でも・・・」  
「ばかじゃないのあんだ。あんにに任せていたんじゃ私たちの計画はがたがたよ。」

「それでは、ど、どうすれば・・・」

「あんたには別の仕事をやるわ。少しおとなしくしてなさい。」

「あ、あの・・・」

そこに駿平が通りかかった。「先生、」

「はっ！」土井はとっさに振り向いた。「な、なんですかな？」

「どないしてん、気分でも悪いんか？」

「そ、そんなことはない。はっはっは。」土井は不必要に胸を張って答えた。

「そやけど、壁に向かってなんかつぶやいてたみたいやけど・・・」

「少し疲れているのです。何しろミーは研究熱心だからね。はっはっは。」

「なんでもええけど、氣いつけや。」

「心配してくれてありがとう。早瀬くん。」

「わいは速水や、ええかげん覚えてや。」駿平はそこを離れた。

「危ないところでした……。」「土井は額の汗をくしゃくしゃのハンカチでぬぐった。

梅雨明け前だというのに放課後の音楽室は西陽が容赦なく窓から差し込んで、五月だというのに異様に暑しかった。

「ほんまに毎日毎日おんなじようにあっついな」。もう梅雨明けしたんとちゃうかな。」

駿平は制服の上着を脱ぎながら窓を開けた。「鍵司、おまえも家で弾いたらええやん。なんで毎日こんな暑苦しい学校の音楽室でピアノの練習すんねん。」

「このピアノな、」鍵司はいつものように蓋を開けながら言った。「おれの指に合ってるんだ。」

「ピアノなんてみな同じやないんか？」

「そう思うのが素人なんだよ。家のピアノじゃベートーベンは弾けねえ。」

「そんなもんかね。」

「このピアノ、音が重いんだ。しかも低音の和音が不思議と濁らねえ。」

「どういうことや？」

「ベートーベンのソナタはな、やたらと低い音が重なってるんだ。こいつをうまく押さえないと、ただの重っ苦しい音楽になっちゃうところだ、このピアノはそこんところが実にきれいに鳴ってくれるんだ。以前このピアノで誰かがベートーベンばっか弾いてたって感じだぜ。」

「へえ。」

駿平は持っていたノートをうちわ代わりにして顔から胸元にかけてばたばた扇いだ。しばらくの間、鍵司の指は鍵盤の上を遊んでいた。いつもなら、それがいくらかも続かないうちに、ピアノに立って

ある楽譜が音に変化していくはずだった。駿平はそこから見えるテニスコートの庭球部の練習の様子をさして興味も示すでもなく見ながら、ベートーベンのピアノソナタが奏でられるのを待っていた。しかし、ふと、ピアノの音が途切れるとベートーベンの代わりに鍵司が口を開いた。

「駿平よ、」

駿平は少しびっくりして鍵司を見た。「どないしたんや？」

「おれさ、いつも不気味に思ってることがあるんだが。」

「なんや、いきなり。」

「あの校長の写真。」鍵司が指さしたのは教室の黒板の上に張り付けられたこの高校の校長、権堂力造のバストアップの写真である。「どう見ても変だとは思わないか？」

「確かにここの権堂校長は変な顔しとるな。」駿平はその写真に近づいた。

「顔だけじゃねえ。同じ写真がいたるところに貼ってあるだろ？」

「そう言えば・・・」

「普通教室はもちろん、美術室にも、理科の4つの教室にも、体育館、武道館、更衣室、トイレにまで貼ってあるんだぜ。こんな学校どこにもない。」

「私立高校やからな。校長の権限は絶対や。逆らえるのはピーチ姫ぐらいのもんやないか？」

「それにしてもしつこすぎる・・・。」

「別にあえやないか。気にせんとときや。」駿平はくるりとその写真に背を向けると笑顔を返した。

「そうだな、死んだ人間の写真でわけじゃないしな。」

ようやくベートーベンが鳴り始めた。心なしか今日はそのソナタは駿平には重苦しく聞こえた。

「キー坊いる？」がらがらっ！突然音楽室のドアが開いてひよいと顔をのぞかせたのは桃子だった。

「やあ、ピーチ姫やないか。どないしてん。」

「あら、駿ちゃんもいたの。丁度良かったわ。」

「また邪魔しにきたな。」鍵司は不機嫌な顔を取り繕おうともせず、桃子を一瞥した。「ごめんね、練習中に。」そう言いながらも桃子はずかずかとピアノを弾いている鍵司の横まで一気に歩み寄った。「ねえ、二人とも聞いて！」でーん！桃子は平手でピアノの鍵盤の低い音の場所を押さえた。鍵司はそれ以上ピアノを弾くわけにはいかなかった。

「なにかあったんか？」

「どうもね・・・」ひそひそ、桃子の声が極端に小さくなった。「青木草男って臭いわ。」

「臭い？」

「青木って、生徒会副会長の青白い男やる？」

「そう。」

「どんな臭いだ？」

「そうじゃなくて、怪しいってことよ。」

「誰が見ても怪しいぜ、あいつ。何考えてつかわからねえ、じめじめしたパソコンオタクだろ？」

「これ見てよ。」桃子がポケットから取り出したのは一枚の紙切れだった。

「ん？」

要注意（抹消すべき生徒）

楊（化学部・爆発物前科2）＝凶悪女

ピアノピアニオタク  
小川＝性格悪い

速水（楊、小川の仲間）＝敵に回すと動きにくい

「なんやねん、これ。」

「『抹消すべき生徒』だと？それに、おれはパソコンオタクにピアノおたくなんて呼ばれる筋合いはねえ！」鍵司は桃子に喰ってか

かった。

「怒る相手が違うわよ。」

「これ、青木が書いたんか？」

「そうよ。」

「なんでわかるんだよ。」

「筆跡よ。」

「おまえ青木の筆跡がわかるのか？」

「まかして。私は化学者よ。」

「どうして化学者が筆跡に詳しいんだよ。」

「そんなことどうでもいいから。」桃子はいらいらして言った

私たちのことよ。」

「んなこた見りゃわかる。」

「それにしても、危ないやつちゃな。それに何やこれ、なんでおれが『敵に回すと動きにくい』んや？」

「女の子に絶大なる人気があるからよ。」

「やめてや、ピーチ姫。」駿平は頭をかいた。

「青木のやつ、なんでこんなメモ・・・」

「私ね、会長への報告文書だと思っのよ。」

「会長？」

「生徒会長か？」

「そ、あの権堂妖子っていう巨大女。」

「あいつが、青木と手を組んでおれたちを抹消するってか？」

「邪魔なのよ。」

「何でだよ。」

「さあね。」

「さあねって・・・この三人の中で一番妙なことでかしているのはおまえだぜ、桃子。心当たりないのかよ。」

「何よそれ。私が何をしでかしたっていつの？」

「化学実験室の壁を爆破しただろっが。」

「あれは事故だっつて。」

「他人がみればテロだぜありゃ。」

「そんなことないわよっ！」

「そや、テロを企てとるやつ本人が、メガネのレンズぶつとばしたり前髪焦がしたりして、いっつも被害の中心人物になつとるなんてまぬけなことするかいな。」

「悪かったわね。駿ちゃん。」桃子は駿平をじろりとらんだ。

「あ、いや、フオローになってへんかった？」

「全然。」

「とにかく、青木のこのメモの真意を調べる必要があるそうだな。」

「ど、ど、どうしたんです？」青木は文字どおり真っ青になって、詰め寄った桃子から身を遠ざけた。

「このメモ、あんたが書いたんでしょ？一体何のつもりなのよ。」

「し、知りません、ボク、そんなメモ・・・」

「とぼけるんじゃないぞ！いいから吐け！」鍵司がアルトリコーダーを振りかざして凄んだ。

「ひいひい！」

「まるでリンチやな。」駿平はそばの壁に身体をもたせかけて腕組みをしたままつぶやいた。

「あんたの書いた字だつてことぐらい、ちゃんとお見通しなんだからっ！」

「・・・」青木はもはや冷汗にまみれて、無言のまま頭を抱えて立ちすくむだけだった。

「こんなところでこいつを尋問しても始まらんわ。まわりに人垣ができてとるで。」

大勢の生徒たちが遠巻きにして彼らのやりとりを見ている。

「ここはひとつ、生徒会室で真相をあばこやないか。」

「それもそうね。」桃子は青木の腕をむんずと掴んだ。青木は恐怖に顔を引きつらせた。「さっさとくるのよ。あんたのボスと話を

つけに行くんだから。」

そうして青木と桃子と鍵司、それに駿平は3階にある生徒会室に向かった。

生徒会室は陰湿な雰囲気狭い部屋だった。やっぱり校長の写真が飾ってある。古びて落書きだらけのテーブルの向こうにあの権堂妖子が不敵な笑いを浮かべて座っている。

「権堂妖子！ついに姿を現したわねっ！」桃子はたんかをきつた。「あら、楊さんじゃない、いらっしやい。」

「いらっしやいだあ？」鍵司は桃子から青木をひつたくると権堂妖子につき出した。「おれたちを抹消する計画があるんじゃないかねえのか？」

「あなたたちを抹消？なんのことかしら？」

「とぼけるんじゃないわよ！このメモが何よりの証拠っ！」バン！桃子はテーブルにあのメモをたたきつけた。「青木のメモよ。」いつの間にか青木草男は権堂の後ろにこそそ隠れていた。

妖子はメモを手にとって目を通した。「知らないわね……。でも、確かにちよつと陰悪なことが書いてあるわね。生徒会長として学校の治安を維持するためにも、調べる必要があるそうね。」そうして権堂妖子は青木の胸ぐらを掴んだ。「青木っ、」

「は、はいっ！」駿平はその時青木の目に涙が浮かんでいるのを見た。

「あんたが書いたの？このメモ。」

「は・・い、いえ、ボ、ボクはこんなメモに覚えはありま・・。」

「本当のことをお言い！」駿平はその時青木の足が床から10cmほど離れた状態になっているのを見た。

「た、た、助けて・・。」

「もし本当なら、あんたが何のために書いたのか、追求する必要があるのよ。わかる？」

駿平はそんな青木が哀れになってきた。「まあまあ妖子さん、そ

んな手荒なことせえへんでも……。」つい助け船を出した。

「そうね、お客さんの前であまりに不調法よね。失礼。」権堂妖子は青木から手を離すと三人に向き直った。どさっ！放り出されたびちよびちよの雑巾のように青木は床に落ちてのびてしまった。「いずれにしても、青木は疑われてもしかたのないことをしました。真相はこの私が責任を持って調べます。ごめんなさいね。」

意外といいやつじゃん、と鍵司は思った。

妖子はすつくと立ち上がると、床にころがった青木をまたいで冷蔵庫に歩み寄った。そうして中からビンを取り出して食器がごからコップを4つ用意すると、その中のものをついだ。

「少しお話をしましょう。」権堂妖子はそう言って麦茶を勧めながら元の椅子に腰を下ろした。

「ありがたい。麦茶とは。」鍵司はそこにあつた椅子に腰掛けた。「私も生徒会長をやっているながら、まだまだあなたたちを始めとする一般生徒たちのことをよく知らないの。この学校での問題点や生徒会としての改善点などがあつたら、遠慮なく言つて下さいね。」

権堂妖子はその巨大な体躯におよそ似つかわしいとは思えない、かわいらしい笑みを浮かべた。

「小川君、ピアノが上手ね。うらやましいわ。」

「それほどでも……。」鍵司はここに何をしに来たかも忘れたように頭をかいた。

「『春のさざめき』をあんなに見事に弾きこなせるなんてね。」

「あ、あの曲、知つてんのか？」

「以前私も挑戦したけど、途中で挫折したのよね。」

「妖子はんもピアノ弾くんかいな。」

「昔ね。ちよつとだけ。」

「よくあんなマイナーなピアノ曲、見つけたな。」

「そんなムツカシイんか？あれ。練習すれば何とかなるんちゃうか？」

妖子は少し寂しげな表情を浮かべた。「私には無理よ。」

「そういえば」桃子が切り出した。「この学校、去年から上級学校進学率アップをセールスポイントにしてるようだけど・・・」

「その通りよ。それがこの学校の目標なのよ。きつと実現するわ」突然妖子の目がきらりと光った。「あなたたちも上の学校に進むつもりなんでしょ？」そしてその生徒会長は右手の小指を立ててグラスを掴むと、自分の麦茶をぐいっと飲み干した。

「俺はべつに・・・」鍵司だった。

「あなたは？」妖子は駿平に向かって聞いた。

「わいも、特に上の学校に進もうなんて思とれへんけど・・・」

「桃子さんは大学を目指してるんでしょ？化学者としての将来を夢みて。」

「私は今でも十分化学者ですもの。そんなのどうだっていいわ。」どうしてこいつは、こんなつんけんした態度をとるのかね、と鍵司は眉をひそめた。しかし、実は桃子はまだこの権堂妖子を信用していなかったのだ。それは鍵司が目の前のコップに手を伸ばした時に証明された。

「待つて、キー坊。」

鍵司は麦茶の入ったコップを手に持った格好で動作を止めた。そしてすかさず桃子は自分のコップを取るとくんくんと匂いを嗅いだ。そうして軽く首をかしげながら少し中の液体を口に含んでみた。「これは！」

「がたん！桃子は立ち上がった。「権堂妖子！これは何？」

「な、何のことかしら？」少しだけだが、妖子は明らかに動揺している。

「ど、どうしたんだ、桃子。」

「キー坊、駿ちゃん、飲んじゃだめよ！」

「えっ?!」駿平も手に持ったコップをテーブルに戻した。

「これはフェノバルビタール入りの麦茶よ。」

「な、なんやねん、そのフェノなんとかって・・・」

「熟眠剤よ。催眠薬よりもっと持続性が高くて危険な薬物。」桃

子は妖子に詰め寄った。「どういつつもりなの?!」

「ちっ! 気づかれちゃあしかたないね、青木! なにしてんだよ、とりあえず逃げるよっ!」

しゅぼん!

「煙幕だ!」鍵司が叫んだ。

「げほげほ・・・」

「待てっ! 権堂妖子!」

煙が薄れてきた時にはもう、権堂妖子の姿はなかった。

「ちきしょう! どこへ隠れやがった!」

「私たちの後ろがたった一つの入口だから、どこかに隠し扉があるはずよ!」

ぐに。「ん?」

「どうした、駿平。」

「何か踏んだみたいや。」

「こ、これは!」

青木が倒れていた。

「こらっ! 青木、」桃子はその痩せた男の身体を激しく揺さぶった。「起きなさいよ! ちよっと!」びびびびびびっ! 桃子は、なにもそこまですしなくても、と誰もが思うであろう激しい平手打ちを、その哀れな男に浴びせた。

「あかん、気絶しとるわ。」

「気が付きそうにないな。」

「とにかく隠し扉を捜しましょう。」どさっ! 青木を放り出して桃子は部屋を調べ始めた。椅子は乱れ、書類は散乱し、筆記用具やファイル、クリップなどの小物が床にはらまかれている。参考書や教科書も無造作にテーブルに積み上げられていて部屋の中は、むちゃくちゃ散らかっていた。かなり調べ甲斐のある状態である。

「ん? この棚・・・」

「どうした、駿平。」

「妙な具合いやで、ほれ、見てみ。」駿平が本や書類の立てられ

た壁に造り付けの棚を何度か押ししてみた。がたがた。

「確かに変ながたつきだな。」

棚の隅に節穴によく似た小さなスイッチがあるのを鍵司が発見した時には、権堂妖子が姿を消してからかなりの時間が経った後だった。

棚がぐるりと回転して奥に通じる通路があった。「後を追うわよ。」

「桃子は二人の男を従えて中に入って行った。しかし、すぐに彼らは権堂妖子を見つけるのを断念せざるを得ない状況に立たされた。」

「行き止まりや・・・」

「ドアだな。鍵がかかっている・・・」

それはただのドアだった。が、内側から鍵がかけられている。びっくりもしない。

「二人ともどいて。」桃子は懐から小さな小瓶を取り出した。「

生徒会室のテーブルの所まで戻っててちょうだい。」

「何だそれは。」鍵司がたずねた。

「ニトロよ。」

「すざつ！」「ニ、ニトロだと?!」

「そ、ドアを爆破するから早く行って!」

「おまえそんなもん持ち歩いてたのかよ!」

「ぐずぐず言わずに離れてよ。」

どたたたたつ！鍵司と駿平はあわてて逃げた。

「いくわよつ!」桃子のそのかけ声の直後に、

ちゅどーん！派手な爆発音が聞こえた。もうもうと煙が通路から流れてきた。

「おいっ！桃子！無事か?」

「だ、だいじょうぶよ、キー坊。」前髪が縮れ、片耳から眼鏡をずり落とした状態で桃子は通路から這い出てきた。「なんとか・・・荒い息遣いで桃子は言った。「なんとかドアは壊れたみたい。行きましょう。」そしてあっさりと立ち上がった。

「ピーチ姫、ほんまに頑丈やな。」

ドアの爆破の際の煙にむせながら三人はドアのあったところから先に暗い通路を進んで行った。ドアは無惨に曲がり、原形をほとんどどめていかなかった。

「桃子は厚さ40mmのアルミのドアより丈夫なわけだ。」

暗い通路をしばらく行くと階段があった。それを昇ってしまった所はもう、ほとんど何も見えない暗闇である。

「刺客に襲われる可能性があるわね。」

「刺客？」

「これは組織的な犯行よ。」

「権堂妖子以外にも俺たちを狙ってるやつがいるってか？」

「可能性は高いな。」

手探りで彼らは通路をさらに進んだ。

「しかし、壁の中にこんな大規模な隠しスペースがあるなんてな。」

「ほんと、上げ底学校ね。」

「前からなりが妙に複雑で不必要にでかいと思ってたんだ。」

「ん？」

「どうしたの？駿ちゃん。」

「穴や。」

「本当だ。」

壁に二つの小さな穴が開いている。

「丁度両目の幅やな。」

「穴があつたら覗きたくなる。これは人間の習性だ。」

「いやらしい！」桃子は軽蔑して鍵司をにらみつけた。が、暗闇

なので鍵司にはほとんど桃子の眼光によるダメージはなかった。

「こ、これは！」鍵司は大声を出した。

「どないした！」

「見てみるよ。」

駿平が穴に目をあてた。「あつ！ここは！」

「どうしたのよ。」桃子も覗いてみた。「ここは音楽室じゃない

の！」

「あれや！校長の写真や！」

「そのようだ。この穴がちょうど壁の校長の写真の目の部分なんだ！」

「と、いうことは……」

「この学校のすべての教室がこうして覗き見できるってこと。」

「ということは、俺たちの行動も何者かによって探られているってことか！」

「学校自体がそんな仕組みになっとなるっちゅうわけやな。」

「ううむ……」

「何か、とてつもない大きな事件が起こる気配がするな。」

「権堂妖子を捜しましょう。」

「そうだな。」

三人はまた歩き出した。先頭は鍵司である。彼が壁に手をついてゆっくり進んで行く。その後に桃子が、そして後ろに駿平が手をつないでついて来る。

「何かあったらすぐに言うのよ。」

「わかってる。」

あたりは真つ暗で、ひんやりとした空気がよどんでいる。

「ごんっ！派手な音が残響した。」

「いててて……」

「どうしたの、キー坊。」

「行き止まりだ。」

「あんた、手より頭を先に出してたの？あきれた。」

「うるせえ。」鍵司は握っていた桃子の手を振りほどいた。

「またドアか？」

「そうらしいな。」

「どないする？あちっ！」

「どうした？」

「このドア、帯電してるぞー！」

「何ですって？」

恐る恐る指を出した鍵司はドアを触ったとたん、自分の指から火花が散るのを確かめることになった。

「ほんとうだ。危ねえな。」

「一旦引き返した方がよさそうね。」

「そうだな。この続きは宿題だ。」

三人は生徒会室に戻った。そして先頭の駿平が廊下へのドアを出ようとした時、鍵司は妖子が座っていた椅子の下の床にキラリと光るものを見つけた。

「どうしたの？キー坊。」

「これは……。」鍵司はそれを拾い上げた。金色のコインだ。500円玉よりも大きい。

駿平も鍵司に近づいた。「コインや。」

「何か彫つてあるみたい。」

「そうだ。なにになに？『大黒天』？」

「大黒天ちゆうたら、大黒さんのことやな。」

「たぶんな。」

「妖子が落として行つたんやるか？」

「おそらく……。」そう言いながら鍵司はポケットから同じようなコインを取り出した。

「なに？キー坊も持つてるの？」

「そうだ。今まで忘れてた。これはな、音楽室のピアノの中にあつたんだ。」

「ピアノの中？」

「鍵盤の下に小さなくぼみがあつてな、そこに入れられてた。」

「何やるな？」

「誰かが落とした可能性は？」

「ないね。明らかに隠してあつた。おまけにそのくぼみの横に宝船の焼印があつたんだぜ。」

「宝船の？」

「そうさ。俺のコインには『弁財天』と彫ってある。」

「つちゆうことは、あと5つ、おんなじようなコインがあるわけやな。」

「七福神のコイン・・・何かあるぜ。」鍵司はピンと指で今拾った大黒天のコインをはじいてみた。

「警察に調査を依頼するか？」鍵司が腕を組んだままで言った。

「そんなのおもしろくないわ。」

「なんだよその『おもしろくない』って。」

「学校が荷担して私たちの命を狙っていることは確か。だったら、堂々と受けて立つのよ。」

「そんな問題やないで、ピーチ姫。」

「いいえ、鬪うのよ。断固として。あんなことされて黙っていられますか。」

「桃子、どんなことされたっけ？」

「私ね、どうもおかしいと思ってたのよ。」

言い忘れていたが、ここは桃子の家である。彼女の家は建築業を営んでいる。『楊建設』という屋号だ。県下でも指折りの高額納税者である。ということは、桃子は大金持ちの娘ということになる。県の庁舎も建てた。農協の農薬研究所も建てた。市のプール付き三階建て体育館も『楊建設』の手になるものだった。したがって桃子が学校の化学準備室を簡単に爆破できるのも、そういうバックボーンがあつてのことだった。

「パパに聞いたらね、あの学校の壁は二重になっているってことなの。」

「そんなことを知っていながら、なんで俺たちにだまってたんだ?!」

「化学準備室は爆発の危険があるから、きつと壁を補強してあるんだわ、普通ね、って思ってたのよ。」

「普通やあれへんがな。」

「そうだ、それに爆発を起こすのはおまえだけだろ。」  
「とにかくや、あんなにまでして企んどることがあるわけやな。  
あの学校。」

「そういうことね。そしてその一味に権堂妖子が加わっている。」  
「青木もな。」

「あいつは雑魚よ。何の役にもたないわ。」  
「意外とおとりだったのかもな。」

「おとり？」

「わざと青木のメモを桃子に拾わせて、」

「生徒会室に呼び寄せたって言うんか？」

「有り得るわね。」

その時、桃子の部屋のドアが開いてチャイナスーツの中年女性が入ってきた。「あら、鍵司くんは駿平くん、いらしゃい。」中国なまりの残る彼女はジャスミンティのポットとカップをテーブルに置いた。

「おじゃましてます、お母さん。」

「ゆくりしててね。」おちゃめなウィンクを残して彼女は出て行った。言い忘れていたが、桃子は中国人だった。両親が中国人だからである。苦労をして日本で建築技術の勉強をし、ここまでになった桃子の父親は、中国人らしい勤勉で純粋な努力家だった。彼と中国人としての誇りを失わない優しい母親の間に生まれたたった一人の娘が桃子である。中国名は『楊 桃蘭』だが、日本名は『桃子』で通している。『楊』も、本当は中国風に『ヤン』と読むのだが、日本にいる間は『やなぎ』と呼ぶことにしていた。桃子は日本生まれで日本語は問題なく話せるが、中国語は両親が教えようとしても覚えが悪くて読んで読み書きできなかった。ただ両親のふるさとの中国にはもう何度も行ったことがあった。鍵司と駿平も一度だけ連れて行ってもらったことがある。その時の感動を駿平は今でも時々思い出しては口にするがあった。

「もいっぺん行きたいなあ、中国。」

「いつでもいいわ。パパに話してみようか？駿ちゃん。」

「遠慮しとくわ。そない何度も世話になるわけいかへんもん。」

「あら、構わないわよ。」

「今度は俺たち、「鍵司だった。「ちゃんと金貯めてから連れて行ってもらうさ。」

「どうして？別に構わないわよ。」

「旅費まで持ってもらおうと親がうるさいんでね。それに、「鍵司は言葉をきった。」

「それに、何よ。」

「あんまり桃子に借りを作りたくないんだよ。」

「まつ！私そんなことで、キー坊をゆるうなんて思っていないわよ。失礼ね。」

「そうかね。」

「中国も好きやけど、俺な、今一番行きたいとこノルウエーやねん。」

「ノルウエーだと？」

「そや。俺、ウィンター・スポーツ思いつきりやってみたいねん。」

「そうか、駿平の今度のターゲットはアイスホッケーか。」

「ホッケーよりスキーやな。」

「確かにノルウエーは本場よね。」

「古代の遺跡にも人がスキー履いとる絵が残ってんねんで。おまけに現国王オーラフ？世の像までスキー履いとる。日本にいても太刀打ちでけへん。」

「古代の遺跡に？本当か？」

「ほんまや。それにな、俺、チームで闘うスポーツよりどっちか言ったら、一人で記録に挑戦する方が好きやねん。」

「スキー、やったことないの？駿ちゃん。」

「何度かやったことはある。けどむつかしいで、あれ。それに日本のスキーは派手すぎるわ。」

「派手？」

「ウエアやスタイルにはつかこだわって、あんなんスキーの本来の姿やあれへん。」

「そんなもんなの？」

「気楽な趣味と厳しい生活の違いや。北欧のスキーは生活の一部なんや。俺そんなスポーツがやりたいねん。」

「ノルウエーねえ。」桃子は駿平の顔をにこにこしながら見つめた。

「何だよ、桃子、気色悪いな。何か言いたいことあるんじゃないか？」

「別に。で、キー坊は？」

「俺？」

「どこに行きたい？」

「俺もぜつたい北欧だぜ。」

「あら、キー坊も？スキーヤーに転向するわけ？」

「甘いな。俺の尊敬する作曲家、知ってつか？」

「ベートーベンじゃないの？」

「違うね。」

「じゃあ、バッハ。」

「あのな、バッハやベートーベンは尊敬するとかなんとかいう次元の人間じゃねえんだ。あの二人はな、音楽家にとつちや神様みたいな存在なんだぜ。好き嫌い言ってる場合じゃないんだよ。」

「じゃあ、誰なのよ。」

「シベリウスだよ。」

「シベリウス？寒そうな名前ね。」

「あほか。」

「シベリウスつちゆうたら確か・・・フィンランドの作曲家やったな？」

「よく知ってるじゃねえか駿平。その通りだ。ロマン派後期、国民楽派を代表するフィンランドの大作作曲家、ヤン・シベリウス。」

「でも何で？」

「あの人の音楽には常に大自然の音が聞こえるんだ。」

「大自然？」

「深い森と、静かな湖、それに張りつめた空気。そういう音なき音がシベリウスの交響曲や交響詩には聞こえるんだよ。」

「ふうん。」また桃子はにこにこして鍵司の顔を見た。

「さつきからなんだよ。桃子、にたにたしやがって。気持ちわりーな。」

「二人とも北欧に憧れてるんだ。うれしいわ。」

「なんで俺たちが北欧に行きたいってのがそんなにうれしいんだよ。」

「実はあたしもなの。」

「桃子も？」

「あたしは何と言ってもスウェーデンね。」

「何でだ？」

「リンネ博物館、スカンセン、ウプサラ大学図書館、それに何と云ってもノーベル賞の授賞式の会場があるところだから。」

「おまえ、まさかノーベル賞とろうなんて思ってたんじゃないやねえだろうな？」

「そこまで野望はないわ。キー坊知らないの？」

「何を。」

「楊 桃蘭とノーベルの共通点。」

「わかった！ダイナマイトや！」

「さすが駿ちゃん。」

「ノーベルは自分で発明したダイナマイトが戦争に使われたことを嘆いて、ノーベル基金を設立した。そうやったな？」

「ご名答！」ぱちぱち。桃子は拍手をした。

「なるほどな。桃子にも見習ってほしい話だな。」

「でもね、それだけじゃないのよ。あたしがスウェーデンに行きたい理由。」

「何だよ。」

「・・・またいつか話してあげるわ。」

「逃げたな。」

「いいからいいから。それはそうと、」桃子は無理やり話を元に引き戻した。

「権堂妖子を通してあたしたちをどうしようって思ってるのかしら、あの校長。」

「校長がボスやるか？」

「当然じゃない。」

「根拠は？」

「権堂妖子は校長の娘よ。」

「それが根拠か？」

「絶対校長が悪の親玉よ。」

桃子のその自信がどこからくるのか、鍵司にも駿平にもついにわからなかった。

「ところでピーチ姫、あの子の催眠薬、」

「熟眠剤よ。」

「そう、それ、なんでピーチ姫にわかつたんや？」

「ばかにしないでちょうだいね。私を誰だと思ってるの？泣く子も黙る化学者、楊 桃子様よ。」

「わかつたわかつた。それより、権堂妖子はその麦茶、飲み干してたぞ。ヤツは特異体質か？」

「バカねえ、キー坊。」

「バカとは何だ、バカとは！」

「あれはね、私たちのコップにだけ薬が塗ってあったのよ。毒殺の常套手段よ。覚えといた方がいいわね。」

「なるほどな。」駿平は感心した。「しかし、あんなフェノ・・・えつと・・・」

「フェノバルビタール。」

「そうそう、そんな薬、よう知つとつたな。」

「実はね、私がこっそり化学実験室の薬品庫にしまっておいたの。」

「なんやて？」

「じゃあ、おまえ、その薬を・・・」

「匂いも味も知ってるのよ。」

「熟眠剤なんか、何に使うんや？」

「単なる化学的な知識欲よ。」

「自分で飲んでみたのか？」

「そんなバカしないわよ。熟眠剤とわかってて飲むおまぬけはいないわ。」

「桃子ならやりかねんと思ってな。」

「でも、ラットは24匹ほど昏睡状態にしちゃったわ。」

「悪魔。」

「思ったよりおもしろくなかったから、薬品庫にしまつて鍵かけたの。」

「おもしろいとかおもしろくないとかいう問題じゃねえ！」

「そう？」

「そやけど、あの生徒会室の麦茶にそれが入つたつたつてことは、誰かが化学実験室の薬品庫から持ち出したつちゅうわけやろ？そのフェノ・・・」

「フェノバルビタール。」

「そうそう。それ。」

「薬品庫から何かを持ち出すことのできる人間が私以外にいないしたら・・・」桃子は考えた。

「理科の教師。」

「そうね。玄海先生しかいないわね。」

「そうか、こりゃあ、学校上げての大事件だぜ。」

「玄海先生がボスかも知れないぞ？桃子。」

「確かめるわよ。」桃子はそう言って立ち上がった。

「確かめる？」

「そうよ。学校に行くわよ。」

「学校に行くったって、今日は日曜日だぜ。」

「だから都合がいいんじゃない。一般生徒を巻添えにしたくはないわ。」

「へえ、わりかし善人じゃねえか。桃子。」

「はたくわよ。」

学校には日曜日でも何人かの教師はいる。部活動をやっている生徒もいる。しかし、この近辺の高校がするような『補習授業』や『模擬テスト』などは日曜日、祭日には決してやらない学校だった。

「平日の、」桃子が切り出した。「授業だけで大学進学率が高くなるって、今の御時世ではどだい無理な話よね。」

「何が言いたいんだ？桃子。」

「宣伝に弱い国民だってこと。この学校の本質がわかってないんじゃない？」

「確かに。」

「で、どないするんや？」

「まずは玄海先生の車から取り掛からなくっちゃね。」

「車？」

「そうよ。ほら来てる、あそこよ。」

洗車したての黒いセダンである。桃子はそのドアのあたりに耳かき棒の反対側の毛玉で何かを振りかけた。

「それは？」

「銀粉よ。」

「なるほど、指紋の採取やな。」

透明なシールに銀粉によって浮き出た指紋を写し取ると、桃子は立ち上がった。「さて今度は化学実験室よ。」

三人は理科棟の裏にある勝手口に回った。

「ここから堂々と入るのか？」

「そうよ。」

「でも、鍵がかつとるんとちやうか？」

「いつもの手だよ、駿平。」

桃子は無言で、きょうびの女子高校が使いたがるとうてい思えないセンスの悪い灰色のバッグから小箱を取り出した。そして丁度粘土のようなピンク色のものを少し取り出して鍵穴にむぎゆる、と押し込んだ。その後導火線をそれに取り付けてドアのノブ全体をゴムの幕で包み込んだ。そうして一方の導火線に100円ライターで火をつけると、急いでその場を離れた。すでに鍵司も駿平も10mほど離れたしげみに、わりと情けない格好で身を隠している。

すぱん！ほとんど爆発とは思えない音をたててドアノブは壊れた。

「大したもんやな。」

「そんな方法があるんなら、早く使えよな。」

「何言ってるの。これを開発するのに一年半もかかったのよ。」

「へえへえ、それはご苦労なこと。」

三人は理科棟に侵入した。これは立派な住居侵入罪である。だが、三人、特に桃子の心の中は復讐に燃える思いの方が優勢で、常識的な理性なるものはその時そこに存在していなかった。いや、もともと理性などという言葉自体が彼女のためにはなかったのかもしれない。

「何ですって?!」

「お、俺は何も言っていない。」

滅多なことは言わない方がいいようだ。(どきどき……)

薬品庫の鍵は桃子自身が持っていた。

「おまえ、いつのまに……」

「こっそりスペアを作っておいたの。」

「一番危ないのは桃子だな。」

彼女は薬品庫のフェノバルビタールの瓶を捜した。それは他の劇薬に隠されるように奥の方にしまいこまれていた。桃子は注意深くその瓶に、さつき玄海鮫子の車でやったように銀粉をふりかけた。そして出た指紋を採取した。

「さて、これで証拠が掴めるわよ。」

「ごくり。固唾をのんで鍵司と駿平は桃子の作業を見守った。ループで観察していた桃子は首をかしげた。「おかしいわ。」

「どうしたんだ？」

「別人の指紋が現れたわ。」

「なんだと？それじゃあ、玄海先生は犯人じゃないってことか？」

「待って！」

「なんだ？」

「どうしたんや？」

「……………」

「おい、桃子。」

「ピーチ姫。」

「これ、あたしの指紋だ。」

「ばた。鍵司と駿平は床にころがった。」

「あほかーい！」

「としたら、考えられることはただ一つ。」桃子は真面目な顔で瓶を観察した。「やっぱり。」

「何が『やっぱり』だ。」

「玄海鮫子のやつ、手術用のゴム手袋を使ったらしいわ。」

「ゴム手袋を？」

「そう。いつも汚れ物を触るときに使うのよ。ここにはたくさんあるわ。」

「証拠は？」

「瓶の蓋のところにゴム手袋の表面についている粉が付着してるもの。」

その時！

「あなたたち！」三人の背後で声がした。

「あつ！」

「玄海鮫子！」

「先生をフルネームで呼び捨てにするなんて、おしおきものね。」

「とうとう姿を現しよつたな！」

「私はテレビゲームのボスか！」 鮫子は憤った。

「あんたの企みは何なんだ！」 鍵司がその化学の教師に詰め寄った。

「何のことかしら？」

「しらばつくれるなよ。」

「何言ってるのよ。私のことより、あんたたちが思いっきり怪しいわよ。」

「怪しいだと？」

「裏口の鍵を壊した挙げ句に、薬品庫の中を物色することが怪しくないとも言うの？」

「そ……」

「また校長室でおしおきしなきゃいけないわね。」

「ちよ、ちよつと待ってや、先生、」

「何？言い訳？速水くん。」

「そうやない、こつちの話も聞いてや。」

「言ってごらんさい。」

「あのな、」 そうしてわりかし冷静な駿平と、興奮しているがどうにかまともな話ができる鍵司とで鮫子に生徒会室での一件を話した。桃子はほとんど切れていてとても論理立てて人に説明できる状態ではなかった。

「で、ピーチ姫が言うにはな、先生、」

「誰よ、その『ピーチ姫』って。」

「あ、すんまへん、この桃子さんのことですわ。」

「変なあだ名つけないでちょうだいね。」

「その麦茶がフェノバルビタール味だったわけで、」

「本当？」

「ほ、本当ですっ！」 鍵司に口を押さえられてもがいていた桃子がこらえきれずに鍵司の手に噛みついた上で振りほどくと、爆破されたダムから水が轟音を上げて流れ出すように叫び始めた。「私の

味覚は特級品です。先生もご存じでしょ？フェノバルビダールの味ぐらい化学者である私にはわかるんです。先生もでしょ？だから、だからその薬品がここにあることを私は知っていたからこそ調べてるんです。私たち三人は眠らされようとしたんですよ。この強力な睡眠剤で、わかるでしょ？生徒会室でいきなり、

「ちよつと、速水くん、黙らせてちよつだい。この娘。」鮫子は大きなため息をついた。

話を聞き終わった玄海鮫子は、腕を組んでうなづいた。

「なるほど。確かに権堂妖子は怪しいわね。」

「でしょ？俺たちが薬品庫を調べている訳もわかっていただけました？」

「でも、どうしてあたしに相談しなかったの？楊さん。」

「そ・・・それは・・・。」

突然無口になった桃子の代わりに鍵司が言った。「言っちゃ悪いんですけど、おれたちこの事件が学校の陰謀だと思ひ込んでたから、自分たちだけで真相を暴こうとしたんです。」

「先生たちはみんな敵だと思っているわけね。」

桃子は無言のままうなづいた。

「ま、無理もないわね。薬品庫に手をつけられるのは、楊さんと私だけだものね。私が疑われるのも納得いくわ。」

「すんまへん、先生。」

「いいわ。あなたたちに協力するわ。」

「ほんまでつか？先生。」

「楊さんに変なことされて、またここを爆破されちゃ、たまらないわよ。」

「す、すみません。」

お、と鍵司は思った。そして、珍しくしおらしい桃子を、ちよつとかわいいと思ってしまった。

「権堂妖子って、校長の一人娘でしょ？」

「そうだけど、だからって、彼女の企みが学校の陰謀と決めつけ

るのはちょっと乱暴ね。」

「確かに。でも校舎にあんな裏の世界があるってのは、どう考え  
ても怪しいと思います。」

「私も初めて聞いたわ。そんなものがあつたなんてね。」

「たぶん全ての校長の写真の目が室内をのぞくためにあると思う  
んですよね。」

「あなたが確かめたのは音楽室だけね？」

「はい。」

「そやけど、先に行けるドアもあつて、権堂妖子がそつから奥に  
逃げたことは間違いあれへん。としたら、裏の通路はあらゆる場所  
に通じているとしか考えられへん。」

「そうねえ……。」玄海鮫子は少し考えた。

「先生、この校舎の設計図は残っていないんですか？」桃子が珍  
しく建設的な意見を言った。

「校長室の金庫になら、ある可能性が高いわね。」

「持ち出せませんか？」

「そうね、それしか方法はないみたいね。わかつたわ、私が何と  
かしてみるわ。」

「おおきに、先生。」

「じゃあ、あなたたちはもう帰りなさい。壊したドアのことは私  
が何とかごまかしくわ。」

「すみません、いろいろとご心配かけて……。」

「いいのよ。かわいい生徒のためならね。」鮫子はウィンクして  
見せた。

あくる月曜日、朝から登校した桃子は学校の様子がおかしいのに  
気づいた。パトカーが数台停まっている。消防車もいる。当然、警  
官が数人校庭にいた。教師の何人かが登校してくる生徒たちを教室  
に追いやっている。

「どうしたの？」桃子は丁度同じ頃に登校してきた鍵司にたずね

た。

「さあな。何かあったことだけは確かだ。」

鼻のいい桃子は唐突に言った。「火薬の臭いだわ……。」

「火薬？」

二人がいつしよにいる所に足早に近づいてきた土井が険しい表情で言った。「ユーたち、すぐに生徒指導室に来たまえ。」

「な、なんだよ、」

「とにかく聞きたいことがある。来なさい。」土井は鍵司と桃子の腕を掴んだ。

「何するのよ！離してよ！」桃子は抵抗した。すると、すぐに近くにいた教師が数人飛んで来て、土井といつしよになって二人を半ば強引に生徒指導室に連行した。

生徒指導室にはすでに駿平がいた。

「あつ！駿ちゃん。」

「やあ、ピー子姫、鍵司も。」

「何があつたんだ？」

「わかれへん。おれも来るなりここへ連れて来られてん。」

しばらくして校長が生徒指導の教師とともにやってきた。

「座りたまえ。」台詞に不釣合いなカン高い声で権堂校長が言ったあと、立て続けに生徒指導の教師が口を開いた。

「おまえら、とんでもないことをやってくれたな。」

たいそうな口のききようである。態度も横柄だった。

「な、なんのことです？」

「しらばつくれおつて。校長室と生徒会室を爆破した理由を言え！」

「爆破？」

「そうだ。何のためにやつたんだ！え？楊！」

「私、何のことだかさつぱりわかりません！」

「それでは、証拠を挙げよう。」校長だった。「君は兼ねてから爆薬の実験を繰り返していた。学校の中で爆発させたことも何度か

ある。」

「そ・・・」

「そんなもん、証拠になれへんやないか！」

「まだある。君たち三人は生徒会室で青木草男にリンチを加えた。そこでも爆薬を使っているだろう。」

「なんやて！リンチやて！」

「そうだ、あれはきさまの娘、権堂妖子がやったんだ！俺たちや関係ねえ！」

「いずれにしても今回の爆破事件もおまえらが犯人であることは間違いない。学校関係者で内部事情を知りつくし、爆発物にも手慣れている者は他におるまい？」

「ふ、ふざけないでよ！じゃあなに、私たちが爆薬を校長室と生徒会室に持ち込んで爆発させたつての？！言いがかりもたいがいにしなさいよ！」

「だまれ！中国娘！」

校長の一言に三人は言葉を失った。

「おまえがこの高校を受験した時に落としてやればよかった。おまえが純血日本人に混じつてのうのうと過ごすのを見ておると腹がたつ。」

桃子は硬直した。そんな彼女に追い打ちをかけるように権堂力造校長はたたみかけた。「おまえは日本人に復讐するためにこの学校に来たのではないのか？爆薬なんぞ校内に持ち込みおつて！先の戦争でひどい目に遭つただの、侵略されたただの抜かしおる中国人なぞ日本から出て行け！この下等民族が！」

桃子は肩を震わせて石のように押し黙つたままだ。

「もういっぺん言ってみろ！校長！」鍵司は椅子を蹴飛ばして立ち上がると、乱暴にテーブルを殴りつけた。「なんで桃子がそんな言われかたをしなきゃなんねえんだ！てめえら教育者だろうが！よくも、よくもそんなひどいことを！」後は言葉にならなかつた。

「日本人がそないに偉いんか？！中国の人が日本人より下なんて

誰が決めたんや！え？あんたらたつた今中国の人みんなを差別したことになるんやで！わかつとるんか！よくもそないな考えで教師やつとるな！見損なつたわ！」駿平は二人を促した。「帰ろ、あほらしい！こないな学校辞めたるわ。さあ、ピーチ姫、鍵司。」

「待たんか！」

生徒指導の教師の静止を振り払って駿平は廊下に出た。

「鍵司、ピーチ姫を。」

「わかつた。おい桃子、行くぜ。」鍵司は優しく桃子の肩に手を置いて、今にも倒れそうな彼女を立たせた。桃子の両の目からはぼるぼると涙がこぼれ続けている。ぺっ！鍵司は振り返りざまに校長に唾を吐きかけた。

「な、なんてことを！校長に向かって！」

「すべての中国人にしたのと同じことをきさまにただけだ！」

「まだ話は終わつとらんぞ！」

「てめえらと話すことはねえ！」

とつさに鍵司に掴みかかった生徒指導の教師の胸ぐらを駿平が締め上げた。「さわるんやない！」そして左手で強烈なパンチを浴びせた。その教師は廊下の壁に背中をしこたまぶつけて床に倒れ込んだ。

「顔も見とうないわ！」

「お、おまえらは退学処分だ！」

「上等やんけ。言うとおりにしたるわい！」

三人が去つた後、権堂校長は興奮状態を無理に落ち着かせようと努力しながら生徒指導の教師に手を貸して立たせた。そして不気味につぶやいた。「このままでは済まさん。。。」

## 二 陰謀『燎原の火』

すぐに校長名の退学通知書が手配され、校内爆破事件の二日後に三人の家庭に送り付けられた。三人とも学校を爆破し教師一人を負傷させたという理由だった。

「負傷やて？」駿平は母親に見せる前にその通知書を開いてみたのだった。母親にはすでにあの事件の後学校から帰って話をしてあったし、事実これ以上宝船高校に通う気はなかった。それは鍵司も桃子も同じだった。駿平は急いで電話に飛びつくと数個のボタンを押した。

「よお、駿平か。俺も今連絡しようと思ってたところだ。」

「鍵司、届いたか、退学通知書。」

「今見たところだ。誰だ？負傷した教師ってのは。」

「ようわからん。」

「とにかく桃子んちに来いよ。俺もすぐに行く。」

「わかった。」駿平は受話器を置いた。そしてその通知書を胸ポケットに押し込むと家を出た。

部屋では、桃子がうつむいていた顔をようやく上げて二人を迎えた。「あ、キー坊、駿ちゃん……。」

「桃子っ！復讐するぞ！」鍵司が拳を握りしめて威勢よく言った。

「そや、あんな人間言うことやない。許したらあかん。」

「ありがとう、二人とも……。」桃子の目から、またぼろぼろと涙がこぼれた。

「元気出しいや。俺たちがピーチ姫のかたき、取ったる。学校に殴り込みや！」

「駿ちゃん……。」

「桃子も、いつまでも落ち込んでるわけにはいかねんだよ。ほら、いつものように元気出しな。」鍵司が桃子の背中を軽く叩くと、桃子は突然立ち上がり、鍵司を抱きついてきた。「こ、こらっ！桃

子！」

「わーん！キー坊！私、くやしいよお！」おいおい。桃子は声を上げて泣きだした。

「わかるわかる。わかるから離せよ。」鍵司は真っ赤になってうるたえた。

ベリベリっ。桃子をようやく引きはがすと、ハンカチで涙を拭ってやってソファに座らせた。

「ありがとう。ハンカチ洗濯して返すわね。」ぐすぐす。

「当たり前だ。」

とか何とか言いながら、桃子はすでに鍵司のハンカチを十数枚プールしていた。

「ところで、負傷した教師ってのは・・・おい桃子、誰だか知ってるか？」

「玄海先生らしいわ。」鼻をすすりながら、桃子は震える声で言った。

「何やて?! 鮫子先生やて?」

「ほんとか? それ。」

「私ね、友だちに電話で聞いてみたの。そしたらね、いろんなことがわかったわ。」

「どんなことや?」

「爆破されたのは校長室の金庫と生徒会室の例の隠し通路みたいなもの。」

「ほほう、確かに俺たちの今後の行動を見透かした場所だな。」

「そうでしょ? 権堂妖子が逃げた通路を使用不能にして、金庫にしまつてある校舎見取図を処分した、ってことになるわよね。」

「で、鮫子先生はどこで?」

「金庫に彼女が近づいた時に突然爆発したらしいの。」

「どの程度の怪我なんだ?」

「顔に包帯、右腕も包帯でぐるぐる巻きにしてあって、見た目はそうとう重傷のようよ。」

「悪いことしてしもたな。」

「時限爆破装置がついていたのかね。」

「それはよくわからないの。警察が調べ尽くしているでしょうから、私たちの手は伸ばせないわ。」

「ふむ……。」

「ただ、」

「ただ？」

「あの時の臭いはTNT火薬の爆発臭だったと思うのよ。」

「TNT?」

「そう、トリニトロトルエンで作られた爆薬。威力は黒色火薬の比ではないわ。」

「そんなにすごいんか？」

「そりゃあもう。テロや戦争に使うのよ。物を徹底的にぶっこわすために作られた爆薬だもの。」

「……玄海先生、入院してるのか？」

「見舞いにいこ。」優しい駿平の言いそうなことだった。

「そうだな。事情も聞きたいしな。」

三人はすぐにそこを出ると玄海鮫子の入院している「黒井整形外科医院」に向かった。

「あつ！木村のおばちゃん！」

「桃子ちゃんじゃないの。どうしたの？誰かのお見舞い？」

「ええ。学校の先生。」

「そう、だから駿平ちゃんと鍵司くんもいつしよなのね。」

『げげっ！あのおばはんや！』駿平は言葉を表情に代えて出した。

『まいったぜ、こんなところに現れるとは……』鍵司も右にならった。

桃子の家の近所の、背丈が桃子とほとんど変わらない小柄な中年のおばさんだった。桃子とは小さいときからの顔見知りである。駿平も鍵司も何度となく彼女と桃子の果てしなく続く会話に巻き込ま

れた経験がある。そのおばさんはゴム入りの白い給食当番帽子をかぶり、マスクをして、白い色がすす汚れて灰色になった作業服を着ていた。

「おばちゃん、この病院で働いてたのね。」

「ちよつと暇を持って余してねえ。先月からよ。」

「そうだったの。」

「何ていう先生なの？」

「玄海餃子。」

「げんかい？聞いたことないわねえ。」

「最近入院したのよ。」

「そうなの・・・怪我？病気？」

「怪我なの。でも命には別状ないっていつから。」

「そりゃよかった。早く見舞っておあげ。」

「うん。」

今日は意外に早めに会話が切り上げられて鍵司も駿平もほつと胸をなでおろした。いつも彼女らの話が始まると、彼らは近くの駄菓子屋でポテトチップスを買ひ、自動販売機で缶ジュースを買ひ、その店の前に座り込んでひとしきりぱりぱりとポテトチップスを食べながら取り留めもないことをぼつぼつと話さねばならなくなるのが常だった。だがそんな時、大した話題もないので、二人はひたすら飲食に興じることになる。そして食物がなくなって、やれやれ、と腰を伸ばした頃にやっと桃子たちの会話が終わる。今回、この病院にはポテトチップスが売られていない。どうしよう、と思っていた矢先に木村のおばさんは桃子から、モップを持って鼻歌混じりに離れて行ったのだった。

「さ、行きましょ。」

「へいへい。」

「助かったわ。」駿平が額の汗をぬぐった。

玄海餃子はベッドに横になったまま、読んでいた本にしおりをは

さんで顔を上げた。

「あら、桃子さん、小川くんに速水くんも。いつも仲がいいわね。」

「先生、すみませんでした。私たちのせいで……」

「気にしないで。あなたたちのせいではないわ。それに、私信じてる。犯人はあなたたちじゃないってね。」

「え？」

「TNT火薬は楊さん、まだ扱ったことないでしょ？」

「やっぱりTNT火薬だったのか。さすがだな桃子。」

「見直した？」

「へえへえ。」

「こないな時にこないなこと聞くのん、失礼やとは思うんですけど。」

「どうしたの？速水くん。」

「ふつとばされた金庫の中に校舎の見取図はあつたんでしょ？」

「そうね。」

「燃えちまつたんですか？」

「火はすぐに消し止められたから、爆弾の近くでなければ燃え残ったかもしれないわね。でも、どうかしらね、見取図の近くで爆発が起こつたらしいから……」

「じゃあ、もう残ってないかもしれへんな。」

「たぶんね。」

「学校の企み暴くの、難しくなってきたな。」諦観の境地に鍵司は入りかけていた。

「そやな、フェノなんかの件も中途半端やし。」駿平もため息をついた。

不意に訪れた沈黙を解消したのは餃子だった。「りんご食べる？」

「あ、すんまへん。じゃ、遠慮なく。」駿平はその言葉にすぐに反応した。彼はベッドの横のテーブルからりんごごとペティナイフを手にとった。

「駿平もなかなかずうずうしいやつだな。」

「いいのよ。食べて。」鮫子が促した。

「ええ、遠慮なく。」

駿平は慣れた手つきでりんごをむき始めた。

「駿平くん上手ね。」

「好きなんですわ、こんなん。おっと！」駿平は手をすべらせて左手のりんごをベッドの上に落としてしまった。

「あら、褒めたとたんに。」鮫子が包帯で巻かれた左手を伸ばしかけて、自由が利かないことに気づいたのが右手でそのりんごを取り上げた。そして駿平に手渡した。

「すんまへん、先生。」

「そのりんご、持って帰れば？」

「そうですね。じゃ、お言葉に甘えさしてもらいます。」

「やっぱずうずうしいぜ。」

「そうゆう性格なんや。ほっといてんか。」

「ま、いつか。そろそろ帰るぜ、桃子。」

「そうね。」

三人がその病室のドアを開けた時、背後から鮫子が後ろ髪を引くようなことを言った。

「あなたたち、宝船高校、辞めるの？」

少し躊躇して桃子が答えた。

「はい。もうこれ以上通えません。」

「・・・無理もないわね。先生も寂しいわ。」鮫子はうつむいた。

桃子は精一杯の笑顔を作って言った。

「しばらくしてほとぼりがさめたら時々遊びに来ていいですか？」

鮫子は寂しく微笑んだ。

「ええ。いいわ。私と対等に化学の話ができるのは桃子さんしかないから。」

「そんな・・・」桃子は照れた。

「さ、行く、ピーチ姫。」

「どうしたんだ？駿平、さっきから黙り込んだままだぜ。」  
「……………」

「何か考え事してるの？駿ちゃん。」桃子は駿平の顔をのぞき込んだ。

「俺の考えすぎかもしれへんけど……………」

「どうしたの？」

三人は立ち止まった。丁度『黒井病院』の門を出たところだった。  
「ん？」

「どうしたの？キー坊。」

「二人ともこっちへ来い。」

鍵司は駿平と桃子を強引に再び病院の敷地の中、広い駐車場に引っ張り込むと、すぐそばにとめてあった黒いワゴン車の陰に無理やり引きずり込んだ。

「どうしたんや？鍵司。そないにあわて……………」

「しーっ！」鍵司は駿平の口をふさいだ。そしてあたりを見回すと声をひそめて二人にささやいた。「校長が来た。」

「何やて?!権堂こうちよ」

「しーっ！」

「ふがが……………」

「本当？」桃子が無声音で言った。

「間違いねえ。あの趣味の悪いサングラスと真っ黒の33ナンバーの車。」

「鮫子先生の見舞いかしら……………」

「たぶんな。」

「あつ！入ってきたで。」

権堂校長の大きな車が病院の駐車場に入ってきた。三人は校長の車に見えない位置にワゴン車のまわりをずりずりと移動した。

校長が病院の中に入って行ったのを確認すると、駿平が突然立ち上がった。

「二人とも、聞いてんか。」

「どうした？駿平。」

「おかしいで、玄海餃子。」

「何が。」

駿平は二人にまくしたてた。「血色のいい顔にあれだけの包帯を  
していて言葉もいつもと変わらん調子や。それにわい、わざとりん  
ご落としてんけど、先生の利き腕は左手やったな？その腕もあない  
な包帯の巻き方から察すると、かなりの怪我や。やけど、りんご取  
ろうとした時、痛そうな顔せえへんかってんで、おかしいと思えへ  
んか？」

「そういえば……。」

「麻酔してたんじゃねえか？」

「麻酔した腕をとっさに動かすなんてできないわよ。確かに変ね  
え。」

「おまけに、設計図の近くで爆発が起こったなんて言うつつたや  
ろ？設計図を俺たちが欲しがつとることは、俺たち三人と玄海餃子  
しか知らんことや。それに、爆薬がその設計図の近くにあったなん  
て、なんで玄海餃子にわかるねん。絶対怪しいで、あいつ。」

「確かに……。」

「それに今の権堂校長や。何かあるで。」

「よしっ！盗み聞きしてやろう。」

「ど、どうやって？」

「おまえが変装するんだよ。桃子。」

「あ、あたしが？」

「そっか、あのおばはんには化けさせるんやな。鍵司も頭ええで。」

「よし、行け！桃子。」鍵司は桃子の背中をひっぱいた。

「ちよつとお……。」

「時間がない。早くしろっ！」

怪しげな掃除のおばさんは、玄海餃子の病室の前をやたらと念入

りに掃除していた。時々動作を止めてドアに耳を張り付けている。

「な、なんて不器用なんだ、あいつは！」鍵司はすぐ近くの喫煙所にある破れかけたソファに下にもぐりこんで桃子の様子を見ていた。「あんなことしたら、おもいつきり怪しいじゃねえか。」

ドクターの一人がそこを通りかかった。桃子はあわててドアから身を離し、本物のおばさんそっくりの鼻歌を歌い出した。

「ったく、わざとらしい・・・」鍵司は舌打ちをした。ドクターが怪訝な顔をして通り過ぎ、向こうの角を曲がったとたん、なんと鼻歌を歌っていた掃除のおばさんは、いきなり病室のドアを開けて中に入っていくではないか。

「ばっ！」鍵司は自分の上にソファがあるのを忘れて立ち上がった。ソファが派手にひっくり返った。「な、なんてことしやがるんだ！桃子のやつ！」

鍵司は倒れたソファを元に戻したあと、再びその下にもぐりこんだ。

何の変化も訪れなかった。鍵司は息をするのも忘れて、冷汗でべたべたになりながら成行きを想像した。桃子が校長に正体を見破られたらアウトである。何もかも水の泡だ。そもそも怪しい玄海鮫子と権堂校長の会話を盗み聴きするのが目的である。桃子のやつ、まさか強引にその会話を割り込もうなどと思っているのではなからうな、いや、それどころか、自棄になり、病室を爆破して二人をふつとばそうなどと思っているのではないだろうか、と鍵司は気が気ではなかった。掃除のおばさんに変装しても、桃子が爆薬を持ち歩いていることは十分考えられる。無鉄砲で危険極まりない娘である。

がちやり。

「はっ！」

病室から出てきたのは権堂校長だった。何くわぬ顔をして、すたすたと去って行った。

「ま、まさか、桃子のやつ、消されたんじゃ！」鍵司は胸騒ぎを覚えた。そしてさっきと同じようにソファをひっくり返して立ち上

がると、桃子が消えた病室のドアを蹴り開けた。「おばさんっ！」  
とっさに叫んだのは桃子の名ではなかった。本当は桃子と叫ぶはず  
だった。が、鍵司の頭は混乱して自分でも何をしているのかわから  
なくなっていたのだった。「あっ！」

おばさん、いや桃子は無事だった。それどころか、大胆にも鼻歌  
を歌いながら床をモップがけしている。

「え？・・・あ・・・」

「どうしたの？鍵司くん、帰ったんじゃないの？」餃子は涼  
しい顔でさつき読みかけていた本を伏せた。

「あ、いや、その・・・」

ちらりと鍵司の顔を見た桃子の視線は怒っていた。

「こ、このおばさん、桃子の知り合いなんです。」

「それで？」

「ちよ、ちよつと桃子に急用を頼まれて、迎えに来たんです。お、

おばさんを。」

「そう。」

「あのさ、おばさん、桃子がね、おばさんに預けた財布を返して  
欲しいって・・・」

おばさんに化けた桃子は無言で手をぼん、とたたくと鍵司といっ  
しよに病室を出て行った。

「ばつかじゃない、あんた。」桃子は自分の頭の給食当番帽子を  
むしり取ると恐ろしい顔つきをしてみつかんばかりの剣幕で鍵司  
に迫った。「いったい、何のつもりよ！」

「そ、そんなこと言っても、し、心配したんだぞ！」

「ふん！今まで私を心配してくれたこと、なかつたくせに。」

「ば、ばか言え、おまえがな、病室に入って行って中で消された  
んじゃないか、って思ったんじゃないかっ！」鍵司も唾を飛ばしな  
がら反論した。

「危うくばれるところだったじゃないの。」

不幸中の幸いだった。あの時鍵司が桃子と叫んでいたら、鮫子は桃子たちの怪しい動きに気づいてすぐさま何か手を打って来るに違いなかった。

「ところで、何か成果があったのか？」

「間違いないわ。鮫子もグルよ。」

「ほ、ほんとか？」

「ええ、危ないところで騙されてたところ。私たちの味方を装って接近して抹消の機会をうかがっていた、ってところかしらね。」

「なんと！」

「再現するわ。二人の会話。私の家に行きましょう。」

「ああ。そうだな。」

さて、桃子と鍵司が鮫子の病室あたりでごたごたしていた時、駿平はどうしていたかというところ、実は彼も掃除のおばさんになりすまして鮫子の病室の会話を盗み聴きするはずだった。桃子の強い提案である。高校生にしては小柄な駿平のことだ、きつとバレないに違いない。とは桃子の無責任な言葉である。実際、彼もあの木村のおばさんに頼んで掃除婦のユニフォームをもう一着借りていた。駿平はトイレでそれに着替えたまでは良かった。彼が変装してこっそりトイレから出ようとして、ふと見てしまった鏡の中に、マスクをしているにも関わらず、見事にキュートなギャルに変身した自分自身がいたのだった。桃子がいつの間にか用意してくれたファンデーションを塗り、それにシャドーを入れた顔とマスクラをつけたまつ毛が異様によく似合っていて、あるうことが鏡の中の自分に対して、一瞬なんて愛らしい、と思ってしまうのだった。三人の中では一番常識的とも言える駿平がそのまままたトイレにこもってしまったのは言うまでもない。

三人は木村のおばさんに掃除の衣裳を返した後、病院の裏口から出て、こっそりタクシーを拾って桃子の家に向かった。駿平はつばの広い帽子を目深にかぶって顔を隠していた。化粧を落としていなかったからである。マスクの下にルージュをさした唇があることを

タクシーの中で鍵司は初めて知った。

「口紅までしてやってたのかよ！」

桃子はそんな駿平の顔をのぞき込んで言った。「かわいい！駿ちゃん。」

「やめろよ、桃子。駿平落ち込んでるじゃねえか。」

駿平は化粧をしている自分のふがいなさより、自分自身を愛らし  
いと思ってしまった自分が情けなくてしょうがなかった。鍵司の言  
った通り、彼は思いつきり落ち込んでいた。

『あの、三人、さつきここに来たわよ。』

『本当かね。』

『あたしが本当に怪我したと思ってるわ。』

『ふん。他愛ないな……。』

『高校を辞めるって言ってたから、大丈夫よ。』

『いや、安心はできん。奴らは仕返しに来るはずだ。わしにな。』

『でも、私たちの計画はうまく実行に移せることになりそうじゃ  
ない？』

『そうだな。秘密を知られる前にうまく返り討ちにできれば一石  
二鳥だ。』

『でも、そんなことやつらは承知の上なんでしょ？そういうリス  
クを冒してまで、あんたに仕返しに来るかしら？』

『来るな。奴ら、特にあの中国娘楊 桃蘭のしぶとさはおまえも  
知っておるだろう？』

『そりゃあね。』

『必ず抹殺してくれる……。』

『恐ろしいこと……。』

『がちや。』

「何だよ、その『がちや』ってのは。」 鍵司が桃子に尋ねた。

「私が病室に入った時のドアの音よ。」

「細かいやつぢゃな。」

「続けるわよ。」

「ああ。」

「それで、いつまで入院しなきゃならんのかね？玄海先生。」

「あと二、三日ぐらいだと思いますわ、校長先生。」

「しらじらしいな・・・。」

「ほんまやな。急に言葉遣いが変わりよった。」

「では、私は失礼しますよ。お大事に。生徒たちも心配しています。」

』

『はい。お見舞いどうもありがとうございます。』

『ピー。』

「な、何だよ、その『ピー』ってのは。「鍵司がたずねた。」

「これで会話の再現を終わりますってことよ。」

「あほか。留守電じゃねえんだぞ。」

「ま、これではつきりしたな。ようやったで、ピーチ姫。お手柄

や。」

「キー坊、時にはあんたもこんなふうに労いの言葉、かけてくれ

たらどう？」

「けっ！」鍵司はソファにあぐらをかいた。

「よお、鍵司に駿平、来てたのか。」ごっつい身体にでかい声の

髭の濃い男がいきなり部屋に入ってきた。

「パパ。」

「どうだった？ん？病院で何か掴んだか？」どかつ！桃子の親父はソファの鍵司の横にその体重を乗せた。びよん！あぐらをかいたまま鍵司は20cmほど飛び上がった。桃子の部屋のソファはスプリングがよく効いている。

「おやつさん、知ってたんですか？」

「あつたり前だ。わしは桃子の父親だ。」

「そ、そりゃそうだけど・・・。」

「パパ、権堂のやつ、私たちを抹殺しようとして企んでいるわ。」

「ほほう・・・ついに本性を現したってわけだな。」彼は腕組みを

した。「そしておまえたちはやつに復讐しようと思っているわけだ。こりゃ、おもしろいことになってきたぞ。」

「なに他人ごとみたいなこと言ってるのよ。かわいい娘の命が狙われてるのよ。少しは心配したらどうなの？」

「なつてしまったことはしかたない。それに、おまえはちよつとやそつとの爆弾でも死なん娘だ。そう簡単には壊れんよ。丈夫に産んだ親に感謝しろ。」

鍵司も駿平も不必要に大きくうなづいた。

「何よ、みんなで寄つてたかつて、あたしをコケにしてっ！」

「まあまあ、桃子落ち着けや。おもしろいこと教えてやるう。」

「え？」

「おもしろいこと？」

「これだ。」桃子の親父が茶封筒から取り出したのは、宝船高校の設計図だった。

「こ、これは！」

「設計図や！」

「どうしたの？これ。」

「わっはっは、わしの顔が広いのがわかったか。」

「確かに広いわね、パパの顔。」桃子は父親の顔をじつと見つめた。

「違うだろ？」父親は娘をにらみつけた。

「どこから手にいれたんです？」

「あの学校を建てたのは『黒井建設』という会社でな。」

「黒井？玄海餃子の入院している病院と同じ名前……」

「そうだ。いいことに気が付いたな。病院の院長と『黒井建設』の社長は兄弟なんだ。」

「兄弟？」

「その上、二人とも宝船高校の理事を務めとる。」

「理事？」

「そうだ。わしもつい昨日の夕方4時まで理事をやったが、

おまえが学校を辞めるといので辞任した。」

「じゃ、じゃあ、黒井兄弟をパパは知ってるわけね？」

「当然だ。だが、この設計図を手に入れるのには、ちと苦勞した。」

「

「い、いったいどうやって？」駿平も鍵司も身を乗り出した。

「盗んだのだ。」

「ぬ、盗んだ?!」

「わしの庭師に頼んでな。」

「庭師？庭の手入れをする人？」

「ふっふっふ、そう思うのが素人の浅はかさよ。そのように見せかけて、実はわしのお庭番なのだ。」

「やっぱり庭の手入れをする人じゃない。そんな人うちにいたっけ？」

「何も知らん娘だなおまえは。」親父は眉間に深々としわを作った。「お庭番というのは、隠密行動をとるわしのボディガードみたいな者だ。」

「ボディガード？」

「その通り。」

「つちゆうことは、そのお庭番が敵をスパイして、その設計図を持ち帰ったってわけやな？」

「ぴんぼーん！」親父は左手の人差し指を立てた。

「誰なのよ、そのお庭番。」

「秘密だ。」

「何が秘密よ。実の娘にも言えないっていの？」

「当り前だ！おまえがいつわしを裏切るかわからんではないか。敵を欺くにはまず味方から、というだろう？」

「わかったわよ。好きにして。」ふんっ！桃子はそっぽを向いた。

「ま、ま、ま、そうへソを曲げるな。そのうち教えてやるよ。」

「で、『黒井建設』にあったその設計図をそのお庭番が持ち出してきたってわけか。」

「ちつちつち、それが違うのだ。」  
「えっ？」

「これはな、『黒井整形外科医院』の地下金庫に隠してあったらしい。」親父の声が低くなった。

「病院の？」

「そうだ。」

「掃除婦に化けて潜入しているお庭番が地下金庫を発見した。そこには黒井兄弟の秘密の書類がうじゃうじゃあったのだという。」

「掃除婦？」鍵司と駿平と桃子は顔を見合わせた。「も、もしかして……」

「ん？どうかしたか？」

「そのお庭番って、もしかして木村のおばちゃん？」

「な、な、なんでわかったのだっ！」親父はうるたえた。

「意外だったな。」

「全然そんな風には見えへんかったな。」

「し、知らなかった……」

「会ったのか？病院で？」

「うん。偶然ね。」

「俺たちの変装を手助けしてくれたんだ。」

「『俺たち』やあれへんやろ？鍵司は変装してへん。」駿平がむきになって言った。

「そかそか。変装したのはおまえと桃子だったな。」

「何だと？駿平も変装したのか？」

「そうなの。駿ちゃんとってもキュートな掃除婦の女の子になったのに、トイレから出てこないんだから。パパにも見せたかったわ。むちゃくちゃかわいかったのよ。」

「やめてや！ピーチ姫！」駿平は悪徳の記憶がよみがえってきて耳まで真っ赤になってうつ向いた。

「ほーかほーか。そりゃ残念だったな。そのうち再現してもらおう。楽しみにしとるぞ、駿平。」

宝船高校では爆発事件の犯人は桃子たちであること、そして彼らは自主的に退学したということ、しかし、未成年であるから刑事事件には発展させないことが全校生徒に告げられていた。そんな教師たちの話を聞くと、さも、学校は三人の悪行をかばってやって、表沙汰にしなかった、という恩着せがましい態度が見え見えだった。そして一学期も終わりに近づいた。

「灰駄先生、本当にあなたの装置でうまくいくのですかな？」校長室で、権堂校長は向かいに座ったよぼよぼの老人に話しかけた。

「心配ご無用じゃ。わしに任せておけばよい。」

「夏休み直前に一週間ほど、でしたかな？」

「そうじゃの。それくらいで効果は十分じゃろう。」

「では7月に入ってすぐからでも。」

「うむ。任せてもらおう。」やせ細ったその灰駄という老人は玄海鮫子に支えられてようやく立ち上がった。

灰駄を送り出すと、権堂校長は再び入ってきた玄海鮫子に言った。

「君も手伝ってくれるのだろう？」

「わかつてるわ。」

「この件に関する設備は全て君に任せてあるのだ。ぬかりはなからうな。」

「私を信じなさい。万端よ。」

「だが、油断はできん。いつあの爆弾娘一味がさぐりを入れるかわからん。」

「もし、彼らが来たらどうするつもり？」

「ふっふっふ、おびき寄せせるのだ。地下操作室にな。」

「危険じゃない？爆弾しかけられたらどうするの？」

「なあに、そんなことをする暇を与えず消してくれる。三人ともな。」

「あんたも悪人ねえ。」

「ふっふっふ……。見直したかね？鮫子くん。」

「この設計図、ちゃんと裏の通路まで描かれているわね。」  
「木村のおばちゃんさままだな。」  
「実に縦横無尽に作られとるな。あちこちに抜け道があるわ。」  
「そうだな。何かあってもすぐに外に出られるってわけだ。」  
「裏の通路を知った以上、私たちの命は危ないわね。」  
「そうやな・・・。」  
「いつ狙われても不思議じゃないな。」  
「慎重にね。キー坊、駿ちゃん。」  
「ピーチ姫こそ、無茶せんときや。」  
「ありがと。」  
「さてと、どうせ命を狙われるんなら早めに突入した方がよさそうませ。」  
「そうね。えっと、抜け道の場所は・・・。」桃子が校舎の設計図を指でなぞり始めた。「全部で4か所、違った5か所みたい。」  
「書き出さず、えっと・・・。」鍵司が赤ペンでメモの用意をした。  
「読み上げるで、ええか、」  
「よし。駿平、頼む。」  
「プールの建物の中、体育館のステージの下、グラウンドの体育用具倉庫の中、中庭の噴水、それに校舎の裏の森の中やな。」  
「特異だな、その森の中ってのは。」  
「一番忍び込みやすいことない？そこって。」  
「そうだな。位置は確認できるか？」  
「思いつきり奥深いところやで、道もあれへん。」  
「なるほど・・・。どうする？桃子。」  
「どうするって？」  
「だから、何のために敵陣に侵入するのか、だよ。」  
「そやな、仕返しする相手は校長やろ？校長をどうしたいか、うちゅうことやな。」  
「本当は・・・殺してやりたいほどなんだけど・・・。」

鍵司はそううつ向き加減で言う桃子の気持ちがよくわかった。

「殺人はまずいんじゃないか？」

桃子は無言でうなづいた。

「校長としての権力の座から引きずり降ろすってのはどうや？」

「そうだな、妥当な線だな。」

「そやけど、どうやって？」

「私、思うんだけど、あの校長、何か裏があるような気がしてならないの。」

「裏？」

「そう。何かとんでもないことを企んでるか、実際にやっているか……。」

「その秘密を暴こうっていうんだな？桃子。」

「確かに性格悪いから仕返ししたる、っちゅうだけやと、こっちの行動に正当性が生まれんな。」

「そう、それに他の生徒たちには罪はないわけだし……。」

「問題が大きいな……。」

「だから、その校長の企みを暴くことが先ね。私の性には合わないもどかしさはあるけど。」

鍵司も駿平もうなづいた。

「よっしゃ、どっちにしても学校にこっそり潜入するしかないな。

話はそれからや。」

「森の抜け道を利用するか。」

「そやな、設計図見るとまっすぐ校舎の下に続いとる。」

「この校舎の下の広い部屋はなんだろうな。」

「行ってみらなわからへん。」

「だが、何かありそうだな、この部屋。」

「決まりね。森から入りましょ。」

小高い丘に建っている宝船高校を取り巻くように深い森が広がっている。その一角、丁度校舎から見てほぼ北の方角に抜け道の×印

はあった。桃子たちはやつと梅雨らしくなつたじめじめとした天気の日を選んで行動することにした。特に理由はない。たまたま彼らが行動を始める前日に偶然雨が降り出したに過ぎないのだった。わざわざおそろいの灰色の雨合羽を用意してゴム長靴を履いて夜が明けるとか明けないかの時刻に三人は行動を開始した。小さな雨が降っていた。道なき道を木や草をかき分けて進む三人の瞳には燃えたぎる復讐の炎が宿っていた。

「こないな森の中じゃ、方角がようわからへんな。」

「心配しないで、駿ちゃん。キー坊に任せて。」

「ん？」駿平が見ると、鍵司が目を閉じて耳をすましている。桃子も駿平も足を止めて口を閉ざした。

目を開けた鍵司は地図を見た。そして桃子たちに向かって言った。「かなり近いところに来ているぜ。」

「な、なんでそないなことわかるんや？」

「学校のプールの浄水装置のモーター音と学校の正門前の交差点の歩行者用信号の盲人用メロディの方角からして、俺達はだいたいこのあたりにいるはずなんだ。そして間もなく駅に電車が到着する時刻・・・」鍵司は腕時計を見た。

駿平はぼかんと口を開けてそんな鍵司を見ていた。「そ、そないな音まで聞こえるんか？鍵司。」

「しーっ！」駿平の言葉を制して鍵司はまた目を閉じた。どんなに耳を済ませても駿平には木々の葉に当たる雨粒の音しか聞こえなかった。

「よし、わかったぞ。」鍵司は目を開けた。「おれたちはここだ。」鍵司は地図の一点をびしっと指さした。「駅のフォームの発車ベル音がこの方角から聞こえた。ということは、さっきの二つの音によって考えられる位置がさらに狭くなつたわけだ。」

「いつもながら見事だね。」桃子が拍手をした。

「そ、そんな音、よう聞き分けられるもんやなあ。鍵司。」

「見損なっちゃ困るぜ。同じグレン・グールドのピアノでも、ト

ロントでの録音とニューヨークでの録音では全然違う。ま、ゴールドはわかりやすい方だがな。」

「あきれるわね。」

「ほんま、人間わざとは思えんな。」

「急ごうぜ、あと10mほどだ。」鍵司は先頭を歩き出した。

そして本当にそのぐらいの距離の所に丸い井戸のようなコンクリート製の穴があった。直径1mほどで金属の蓋がついている。

「これだぜ。」

「そのようね。開けられる？」

「だいじょうぶや。」駿平はそう言ってその少し錆のきている重そうな蓋に手をかけた。「ん？」

「どうした、駿平。」

「宝船マークや。」

「本当だわ。」

金属製の蓋の中央に小さく目立たない宝船の絵が描かれていた。

「これも・・・蓋や。」駿平はその絵の部分が直径5cmほどの小さな円盤になっていることを突き止めた。そしてそれを回転させてはじめてみると、中から金色のコインが姿を現した。

「こっ！これは！」

「七福神コインだ！」

「寿老人や。三個目やな。」

「いったい、何なのかしら？このコイン。」桃子が駿平から受け取ったその金色に輝くコインを眺めながら言った。「でも、」彼女は顔を上げて二人を見た。「ピアノの中に弁天さん、この森の中に寿老人ということは、何となく場所と神様との関連を匂わせるわね。」

「なんでだ？」

「弁天さんは音楽の神さんや。」

「だから音楽室か。で、寿老人は？」

「かなりこじつけだけど、」そう前置きして桃子は言った。「寿

老人の絵には鹿もいつしよに描かれることが多いのよ。鹿は森に棲むでしょ？」

「まあ、そりゃそうだが……。」

「あくまで推理だけだね。」

「何か秘密があるに違いねえ、おまえ持ってる。」鍵司は桃子にコインを管理する役目を押しつけた。「あとのが見つかったらまた何か推理しろよ。」

桃子は珍しく何の反論もせずにコインをポーチにしまった。

「ほしたら開けるで。」駿平が侵入口の蓋に手をかけた。「よ、よいしょつと……。」

「がこん。蓋が開けられた。ワイヤーロープと鎖で作られた縄梯子が下がっていた。中は真つ暗である。」「どうする？ピーチ姫。」

「どうするもこうするも、中に入るしかないじゃない、駿ちゃん。」

「それもそうやな。」

「よし、俺が先頭で、」鍵司が言った。

「大丈夫？キー坊。」

「なあに、心配するなつて。」

「暗闇に弱いでしょ？」

「なんだと？何を根拠に……。」

「前にドアに頭突きしたこと、あつたな。そう言えば。」

「ほつとけ！行くぞ。」

鍵司を先頭に、桃子を間にはさんで三人は暗い井戸の底に降りて行った。

「雨合羽が邪魔やな。動きにくうてかなわんわ。」駿平が不満を漏らした。

「脱ぐわけにはいかないわ。もし、誰かに見つかって逃げるときにその合羽からアシがつくわよ。」

「その通りだ。このまま学校に入ったとなれば、俺たちや立派な不法家宅侵入罪だぜ。」

「この手術用のゴム手袋も指紋を残さんためか……。」駿平は自分の手を見てぶつくさ言った。

鍵司は持つてきた懐中電灯で先を照らしながら歩いている。縦穴の井戸の底からは校舎に向かってまっすぐに横穴が続いていた。思ったより天井も高く、造りも頑丈そうだった。ただ、壁をしらべても灯はなく、ただつるりとした黒い金属版が張つてあるだけだった。

「牢獄に向かつて歩いとる感じやな……。」

「不吉なこと言わないでよ。駿ちゃん。」

三人の足音だけが彼らの耳を刺激した。

「そろそろ校舎の床下あたりにたどり着くはずなんだが……。」

鍵司がそう言った直後に彼らは通路を塞いだ壁に行き当たった。

「やつぱりな。壁だぜ。いや、ドアか？」

「壁なわけあれへんやないか。俺たちが歩いてきたのは通路やで、中とつながつとるはずや。」

「だが……取っ手も何も……ないぜ。」

「本当？」桃子が鍵司の手から懐中電灯を奪って調べ始めた。「

本当だわ。」

「俺の言うことも時には信じろよ。」

「変ねえ。電動で開くのかしら……。」

その金属製のドアは押しても引いても横に動かそうとしてもびくともしなかった。

「つまりや、外からは開かないようになつとるんと違うか？」

「あり得るな。ん？」鍵司が二人の口を閉じらせてそのドアに耳を当てた。「何か聞こえるぞ。」

三人は息を凝らした。鍵司はそのドアの向こうの音を残さず聞き取ろうと微動だにしない。しばらくして鍵司は桃子と駿平に自分のささやきが聞こえるくらいの位置に近づくように指図した。「おい、今何時だ？」

鍵司と同じようにひそひそ声で桃子が言った。「7時を少し回ったところよ。」



「どうする？桃子。」

「証拠がいるわ。」

「そうだな・・・。」

「このドアが開けば二人をとっつかまえて、」

その時だった。出し抜けに三人の目の前のドアが上にすると上がっていった。

「あつ！」

ドアの向こうは広い部屋だった。そしてうずくまるようにしていた彼らを見おろして権堂校長と灰駄が立っていた。

「ばかめ。飛んで火にいる夏の虫とはおまえらのことだな。いや、虫にしては態度がでかいな。その格好からしてねずみだな！」

「しまった！」

「逃げる！」駿平は桃子の腕を掴んで立ち上がった。鍵司がそれを助けた。

「逃がさん！」

逃げる三人の背後からごんごん、という震動が伝わってきた。

「な、何やあれは?!」

「立ち止まるな！走るんだ駿平！」鍵司が叫ぶ。

「ふっふっふ、ねずみの黒焼きだ。覚悟せい！」権堂校長の声が響いた。その直後、バチバチッ！壁に火花が飛び散った。

「こ、これは！」桃子が走りながら叫んだ。「壁に電流が流れているわ！」

しかし、何事もなく三人は入ってきた井戸にたどり着くと、大あわてで鎖の縄梯子を昇り、ころがるように外に出た。脱出に無事成功した三人はダッシュで逃げて行った。

「うぬぬぬ！な、なぜ効かなかったのだ！」

さっきのドアのところ立ちすくんだまま、権堂校長は拳を震わせた。

「普通の人間ならとっくに感電死しているはず・・・。」  
背後で灰駄がぼそりと言った。「ゴムは絶縁体でしてな。」

「危機一髪ってとこやったな。」

三人はもう桃子の家に帰り着いていた。

「偶然とは恐ろしいもんだな。」

「何が『恐ろしい』よ。命が助かったのよ。感謝しなくちゃ。」

「ゴム長靴とゴム手袋さままだな。」

「さて、いよいよ俺たち命が危ないぜ。」

「今さら同じことよ。それより、もうあの井戸からは侵入できないわね。」

「なんでだ？」

「だ、だって、同じ手口じゃすぐにバレちゃうわ。」桃子はあわてて言った。

「放射線発生装置に一番近い抜け道だぜ。あれを何とかしなくちゃいけないじゃねえのか？」

「そ、それはそうだけど・・・」もごもご・・・桃子は言いよどんだ。

「さては、何か隠しとること、あるな？ピーチ姫。」

「言え！何をした。」

「ちよ、ちよつとね。」

「ちよつと何をしたんだ？」

「逃げるときに井戸に爆薬を投げ込んだのよね・・・」

「あ、あほか！後先考えねえヤツだな！おまえは！」

「だ、だって追って来られたら大変じゃない。あたしだって必死で考えてたんだから。」

「けっ！おまえが考えること、物を爆薬でぶっ壊すことだけじゃねえか。」

「そんなことないわ！」桃子は反論した。

「だいたいなあ、おまえのその悪癖のおかげで俺たちまで巻添え食ったんだぞ！学校爆破の犯人にされちまって・・・」

「まあまあ、こんなとこでケンカしとる場合やない。もっと冷静

に考えなあかんで。」「いつものように駿平が仲介に入った。だが、鍵司の悪態は収まりそうになかった。

「まったく、よく考えたらなんでおれがこんな危険なことしなきゃなんねえんだ。」

「なによ！いいわよ！そうまでしてつき合ってくれなくても。キ坊帰ってよ。あたし一人でもやるから。」桃子は涙ぐんだ。

「おまえ一人で何ができるってんだ？え？」

「できるわよ！キ坊なんて大嫌いよ！帰って！」桃子は本格的に泣き始めて近くにあった雑誌『ニュートン』8月号の特集＜イオンって何だ！＞を鍵司に向かって投げつけた。

「ああ、帰ってやるよ！かわいくねえ！もうおまえなんか助けてやらねえよ。」鍵司は

立ち上がった。そしてすたすたと桃子の部屋を出て行った。

「ちよ、ちよつと待ちいや！鍵司。」駿平が後を追った。そしてドアを出る直前に振り向いて桃子に向かって言った。「ピーチ姫、今は喧嘩しとる場合やないんや。鍵司が悪いのはわかってる、けどな、ピーチ姫も感情的になったらあかん。また来るさかいな。一人で無茶したらあかんで。ええな。」

鍵司と駿平が去った後、桃子はしばらくしゃくりあげていた。そしてようやくポケットからハンカチを取り出して涙を拭いた時、桃子の親父がノックもせずには部屋に入り込んで来た。

「パパ、ノックぐらいしてよね。」涙顔を取り繕おうともせずには桃子は父親をにらんだ。親父は桃子の隣にどかりと腰を下ろした。反動で桃子はぴょんと飛び跳ねた。

「鍵司の気持ちもわかってやれや。」

「わからないわよ。あんな無骨な男の気持ちなんか。」

「本気じゃないんだ。鍵司もな。」

「本当かしら。」

「不器用なんだよ。あいつはな。だが、喧嘩っ早くて口の悪い乱暴者のおまえによく合わせてくれてるじゃないか。」

「よくも自分の娘をそんなに悪し様に言えるわね。」

「もう少し大人になつたらどうだ？付き合いは長いんだ。」

「許せなかつたのよ。あいつの言い方が。」

「だったら聞かすが、お前今まで鍵司に『ごめんなさい』って言ったこと、あるか？」

「……」

「なかるうが。鍵司の文句を言う前に自分の性格も考えなきゃあな。」

「でも、あいつも私に優しくしてくれたこと、なかつたわよ。」

「お前の今持っているハンカチは誰のだ？」

「え？」

「気づいてないだけなんだよ。」

「……パパ……」

「今日はもう寝る。眠れば気分も落ち着く。」

「寝ろつたつて、まだ真つ昼間よ。」

「カーテン閉めればそれなりに暗くなる。それに今のお前は、夜眠ろうとしても眠れんさ。」

「変なの。」

「じゃ、おやすみ。愛しい娘、桃蘭よ。」

「気持ち悪い。」

「わっはっは！」

呵々大笑して親父は部屋から出て行った。

「さて、ここはプールの更衣室だ。」

「そないなこと、わかっとする。問題はやな、どうやって秘密の抜け穴を探すかってことや。」

「そんなことはわかつてるよ。駿平。」

鍵司と駿平は宝船高校の5つの秘密の抜け穴のうちの一つ、プール脇の建物の前に堂々と立っていた。まだ暗い未明のことである。

「どうでもええけど、鍵司、懐中電灯で俺の顔照らさんといてか。」

「・・・おまえ、本当に美形だな。」

「な、なんやねん！俺にそんな趣味ないで！」

「女装して化粧すれば男が寄って来るぞ、絶対。」

「あほっ！」

「身体付きも華奢だしな。」

「そ、そないなことより早う抜け道探さな。」

「わっはっは。赤くなつてやがる。かわいいやつだな。」

駿平は建物のドアを一つずつ調べ始めた。まず一番端にある機械室である。中から時折浄水装置のモーターが回る音がする。

「どう思う？鍵司。」

「ん？なかなかかわいいぞ。」

「あほかっ！もうええっちゅうねん。」

「冗談だよ。」鍵司は駿平の肩を軽くたたいた。「鍵は当然かかっているだろ？」

「ああ。しつかりとな。」

「あきらめるしかねえな。次だ。」鍵司は隣のドアのノブに手をかけた。男子更衣室である。「ここもだめだぜ。」

「しゃあないな。そやけど、男子更衣室には抜け道を造るような場所あれへんかったで。」

「そんな怪しい場所があったら秘密の抜け道とは言えないんじゃないか？」

「それもそうやな。」

「こつちもだめだ。」鍵司が次に挑戦したのは用具室である。ピクト板や薬品が入っている。「ここが一番怪しいんだがな。」

「なんでや？」

「棚は多いし道具は散らかってるし、一番ごちゃごちゃしてるじやねえか。」

「校舎の設計図、もっとしつかり見とくんやったな。」

「見たさ。」

「ほしたらどこに抜け道があるかわかるんやないんか？」

「それがここに限ってはよくわかるんだ。たぶんこの建物の設計図は別にあるんだろうな。」

「ふーん。」駿平は最後のドアのノブに手をかけた。「ん？」

「どうした駿平。」

「開いてるで、ここ。」

「いやらしいやつだな。」

「な、なんで俺がいやらしいねん。」

「ここ女子更衣室だぜ。」

「開いてた、言うただけやないか。だいたいこんな夜中に着替えしとる非常識な女がおるかいな。」

「冗談だよ。駿平、おまえ本当に純情だな。すぐムキになって……」

「鍵司が悪いんやないか。からかうのもええかげんにしてほしいわ。」

「入ろう。」

「こないなとこに抜け道なんてあれへんて。」

「わからんぞ。とにかく入れよ。」

鍵司は駿平を中に押し込んだ。

「な、なにすんねん。」

これが女の子だったら……と鍵司は一瞬とんでもないことを考えて、あわてて自分を否定し軽蔑した。

「ピーチ姫、誘わんでもよかつたんか？鍵司。」

「へんっ！あいつの顔なんか見たくないね。」

「そんなこと言うて、ほんまのこと言うたらどないや。」

「な、何だよ。」

「喧嘩して顔合わせづらいんやろ？俺にはわかるんや。」

「けっ！あいつがいても邪魔になるだけだよ。いっつも足手まといになつてやがる。」

「無理しよるわ。」

鍵司は床を調べ始めた。駿平は柵を見ている。

「おい、駿平！」にわかに鍵司が大声を出した。そして振り向いた時、意外に駿平が近くにいたことに彼は驚いた。柵に怪しいところを認められなかった駿平はきよるきよるしながら何気なく鍵司に近づいていたのだった。そして、

「う・・・！」

あまりにも接近しすぎていた二人は思わず抱き合ってしまった。その上、あるうことが鍵司と駿平の唇が重なってしまったのだっ！「うわわわわーっ！」鍵司はさらに大声を出した。そして慌てて駿平をはねのけた。

「な、な、何すんねん！」駿平は真っ赤になって叫んだ。

「お、お、おまえがあんまり近くにいろからこ、こ、こんなことになるんだ！」

「どあほっ！ど、ど、どないしてくれんねん！」

駿平にとってはファーストキスだった。

「そ、それはこっちのセリフだっ！」

鍵司にとってもファーストキスだった。

二人が呼吸を整えるのにえらく時間がかかった。そしてなんとか気を落ち着けると、しかしまだ震えが止まらない声で鍵司は言った。「ど、どうやらここだぜ、抜け道。」

「ほ、ほんまか？」

「ほ、ほれ、ここ、見てみる。ゆ、床がべこべこしてるぜ。」

まだまだ二人の会話はぎくしゃくしている。

鍵司は部屋の隅の床で軽くジャンプしてみせた。確かに鈍い音がする。

「間違いなさそうやな。」

二人がかりでその床を調べて、1m四方の正方形の板を巧妙にはめ込んであることを突き止めた。そしてその板を外すと案の定下に降りるコンクリートの階段が現われた。

「行こう。」駿平は心臓の高なりを無理に押さえるように、勢い

よく言った。

「待った！」

「どないした？鍵司。」

「またあつたぜ。」

鍵司は板がはまつていた場所の角に宝船のマークを見つけたのだ。

「ここにもたぶん・・・」そう言って鍵司は、コンクリートの床の一部になつてゐる宝船マークのついた小さな蓋を外した。「ほら、

あつたぜ、駿平。」

「コインや！」

「恵比寿さんだ。」

「恵比寿さんちゆうたら、海の神さん。」

「ここはプールだ。あながち関係なくもない。」

「そうやな。」

「これで4つ揃つたわけだ。」

「あと3つか・・・。」

二人はその階段を降りた。しばらく歩くと通路が二手に分かれていた。

「妙だな。」

「何が？」

「設計図と違つ。」

「なんやて？」

「こんな所に分かれ道なんかはないはずだ。」鍵司は持つてきた校舎設計図のコピーを広げて懐中電灯で照らしながら確認してみた。

「間違いねえ。」

「後で造り変えた可能性は・・・」

「あるな。確かに。この設計図はたぶん校舎建築の前に描かれたものだ。」

「たいてい設計図つちゆうんは建てる前に描かれるんとかやうか？」

「・・・ま、まあそりゃそうだが。」

「となると、地下通路に関してはこの設計図は役にたたんことになるんか？」

「十分考えられるな。」

「ううむ・・・これがどこにつながつとるかわからんとなると、かなりやつかいやな。」

「いいさ。行き当たりばったりはいつものことだ。」

「帰り道わかるんか？」

「おれの方向感覚を信じろよ。駿平。」

「大丈夫かなあ。」

すたすたと歩き始めた鍵司の後を駿平は不安気について行った。

「おっと！」急に立ち止まった鍵司の背中に駿平はどしんと体当たりをした。

「ど、どないしてん、急に。」

「障害物だぜ。」

二人の行く手を阻んでいたのは水溜りである。通路が切れて、その先は水路状態だった。だが、数メートル先からはまた床が続いている。明らかに外部からの侵入を防ぐための仕掛だった。

「泳ぐしかないか・・・」

「待て！駿平。」鍵司があわてて水に入ろうとした駿平を制止した。「怪しいぜ。」

「何が？」

「湯気が上がっている。」

「熱湯か？」

「いや、熱湯なら通路に湿気が充満しているはずだ。もしかすると、これは・・・」

鍵司は靴の先を少しその水に浸してみた。すると靴の底のゴムの部分がどろりと溶けてしまった。

「これは酸だぜ！」

「酸やて?!」

「よかつたな、駿平、泳ぎきって上がったときはおまえ骸骨にな

つてたところだぜ。」

「剣呑極まりないな。」

「これ以上進めんな・・・。」

「鍵司、ちよつとどいててくれるか？」

「な、なんだよ、駿平。」

鍵司を壁に張りつかせて駿平は今歩いてきた道を引き返し始めた。

「お、おい、駿平・・・。」

「そのままじつとしとるんやで、鍵司。」

「お、おまえ何する気だ？」

駿平は10mほど下がった位置に來ると立ち止まり、大きく息を吸い込んだ。そしておもむろに酸の水溜りに向かって走り始めた。

「や、やめんか!ばかつ!」

鍵司が止めるのも聞かず、駿平は水溜りの縁に足をかけてジャンプした。見事なフォームでひらりと宙を泳ぎ、信じられないほどの距離を跳んで酸の水溜りをクリアした。

「10点満点や!」

啞然としている友人のピアニストの方を振り向いて、その懐中電灯のスポットライトを浴びながら駿平はウィンクした。

「これくらいできな、スポーツ万能の駿ちゃんとは呼べんわ。」

「す、すげーな、おまえ。あらためて見ると・・・。」

「大したことない。」

「だが、俺はたぶん溺れて理科の骨格標本になっちまうぜ。」

「心配いらんて。ほれ、ここにスイッチがあるやんか。」

駿平は壁に取り付けられたスイッチを押した。すると酸の水溜りをふさぐように両側から床がせり出してきた。

「そうか、内側からは障害物を越えられるように作ってあるんだな。」

「でなければ抜け道とは言われへんもんな。」

ぴつたりと、まるで最初から床であったように酸の水溜りは消えた。

「さて、とりあえずこの通路はまっすぐ続いている。」

「そやけどわき道もぎょうさんあるな。」

障害物を警戒しながら二人は歩いた。所々に横道があった。

「とにかく、これをまっすぐ行くとどこにつながっているかを確かめるとしようぜ。」

「そやな。」

そしていくらかも進まずに彼らは階段にぶち当たった。降りてきた時と同じ、冷たいコンクリート製である。鍵司はためらわずに一段ずつ昇り始めた。

「気いつけや。」

「わかつてる。」

女子更衣室の隠し扉と同じように、階段を上り詰めたところの天井に、蓋があった。しかし、鍵司がいくら上に押しても動かない。

「駿平、ここを抜けるとどこだと思う？」

「さあな。そやけど、まるでプールの穴とおんなじ造りやな。」

「そう。俺が思うにここは体育館のステージ下だぜ。」

「間違いなさそうやな。」

「お！」

「なんや？開きそうか？」

「違う。またコインがあるぜ。」

「ほんまか？」

「ああ、ここに・・・」コンクリートの壁にさつき更衣室で見つけた時と同じような宝船マークつきの小さな蓋がある。「たぶん・・・」鍵司はそれをこじ開けた。そして中から見つかったコインを手のひらに置いて、駿平に懐中電灯で照らしてもらった。

「毘沙門天やて？」

「そうか、やっぱりここは体育館の下だ。」

「なんでや？」

「毘沙門天つて闘う神さんだろ？」

「なるほど、スポーツの闘志に関係しとるっちゅうわけやな。」

「しっかし、なんで開かないんだ？」鍵司は何度も天井を押してみた。やはりびくともしない。

「スイツチらしき物もあれへんしなあ・・・。」

「にしても妙だぜ。隠し扉にしてはガタつきがない。おまけに目張りまでしてあるぜ。」

「ほんまやな。」駿平も少し考えた。「なあ、鍵司、横道を調べることにはせえへんか？」

「そうだな。」

二人は階段を降りた。その時、

「ん？何だ？」

「ん？何だ？」

「おお・・・。」

「な、何の音やる？」

遠くの方から不気味な音が聞こえてきた。

「あつ！」帰り道を懐中電灯で照らしていた鍵司は叫んだ。「水だっ！」

二人の入ってきた女子更衣室の方から水がものすごい勢いで流れしてきたのだ。

「水責めや！」

「しまった、謀られた！」

「鍵司、急ぐで！」

返事をするのもそこそこに鍵司は水の流れを逆らって走り始めた。

「出口を探さんと！」

引き返しはじめて最初の横道はすぐに行き止まりになっていた。

「だめだ、行き止まりだ！」

水はもう彼らの腰のあたりまでできている。すさまじい量である。

「プールの水を一気に流し込む仕掛らしいな。」

二つ目の横道も行き止まりだった。

「おおおお！どござんせー！」

「あかん！溺れてまうわ！」

その時、鍵司の懐中電灯の光の中に人影が浮かび上がった。

「誰だっ！」

「キー坊！駿ちゃん！やつぱりここだったのね。」

「桃子っ！おまえ、なんでここに！」

「事情は後で。私についてきて！」

くるりと振り返って背中を見せた桃子は、彼女のすぐそばにあった横道に入って行った。

「お、おい、待てよ、桃子！」鍵司と駿平は必死で水をかき分けて、というより、半ば泳ぎながら桃子の後を追った。鍵司でさえ背伸びしてようやく頭が出る程度に水かさが増えていた。小柄な駿平はすっかり姿が見えないほどである。が、さすがにスポーツ万能の彼のこと、ごうごうと渦巻く水の流れもなんのその、抜き手をきつてずんずん泳いで行く。いつの間にか先にいた鍵司を追い越してしまっていた。「お、おい、駿平！がぼぼ・・・」

どちらかという泳ぎは苦手な鍵司はこのまま溺れて死んでしまふのではないかと本気で思った。そしてあっけなく水は天井まで届き、もはや空気の居場所はこの通路の中にはなくなった。

「おい、見るよ、あの噴水。」

校舎の3階の窓から2年生の男子生徒が中庭を見おろして言った。

「なんだ、あの噴水生きてたんだ。」

「水が出てるとこなんか初めて見たぜ。」

「しかし、何で今ごろ突然水が出始めたんだ？」

「わからんな。水道管、詰まってたんじゃないか？」

「突然直るか？」

「・・・それにしてもものすごい高さに水を噴き上げてるぜ。」

「そうだな。真ん中の天使の像が見えないもんな。」

中庭は白い人造大理石で造られた古代ローマ風のものだった。庭自体が地面からずいぶん掘りさげてあり、丁度、水のないプールといった風情だった。その中央にある円形の噴水は真ん中に水瓶を腰

に持った格好の天使の像が立っていて、それをはさむように鶴と亀の像が取り付けてある。和洋折衷と言えば聞こえはいいが、はっきり言って、古代ローマ風中庭には不釣り合いな構図だった。その噴水が今、突然思いついたようにその機能を発揮し始めたのだった。天使の水瓶からもどろどろと水があふれ出ている。

「普通じゃないぜ、この噴水……」

わいわい……。丁度始業前の休憩時間なので、その長い間乾ききっていた中庭の噴水が狂ったように息を吹き返したのを、教室の窓という窓から生徒たちが珍しそうに眺めていた。

「あっ！」

びしびしっ！

「ふ、噴水が壊れた！」

「な、なんて非常識な。」

「自分が噴き上げている水で壊れるとは。」

どどーん！どぼどぼどぼ！

太い水柱が噴水を包み込んで猛烈な勢いで上がり始めた。すでに中庭は水浸しである。

鍵司は意識が薄れかけた時、不意に強い流れに身体が翻弄され始めたのを感じた。そして彼は目の前が突然明るくなった時、空気がそこに存在するのを知ってあわてて肺に酸素を送り込んだ。

「ありや？人柱まであがつてつぞ。」

「なにい！人柱なあ？」

「ああ、見てみな。人が三人……。ありや小川だぜ。」

「それに……。速水駿平！」

「ということは、もう一人のいちばんぶざまな格好で水に弄ばれているのは……。」

「揚 桃子だ！」

「いつも三人仲良しだな。」

「なにのんきなこと言ってるんだ！助けなくていいのか？」  
「大丈夫みたいだぜ。ほれ。」

意識がはつきりした鍵司は水の中でもがいている桃子を助けようとがむしゃらになっていた。

「おい、桃子！」

「キー坊ごぼぼっ！た、助けてげべべっ！」

「俺につかまるんだ！」

「危ない！鍵司！後ろっ！」駿平が叫んだ。

その声に後ろを振り向いた鍵司は、水瓶を抱えた天使の強烈な頭突きをくらってしまった。

「あーあ、小川もドジな野郎だな。」

第三者は気楽なものである。いつの時代も傍観者は何の役にも立たない。

天使の頭突きをくらって意識がもうろうとしている鍵司の目に金色に光るものが映った。それは壊れた亀の像の腹に張りついていたのだった。彼は思わずそれを亀ごと手にとった。そして鍵司の意識はしだいに遠のいていった。

「逃げてくぜ。」窓の生徒の一人が三人を指さした。

駿平は桃子の手を引いて、そして桃子は気を失った鍵司の首ねっこを掴んで走りだした。鍵司は当然引きずられて行く。

「あの三人退学になったんじゃないかなかったっけか？」

「おとなしくしてなかったんだな。」

「しかし、なんで噴水を破って突然現われるんだろうな。」

「さあな。」

キンコーン。

「あ、授業が始まるぜ。」

まったく薄情なクラスメートである。

「キー坊。ありがとうね。それに……ごめんなさい……。」  
桃子はうつ向いた。

「けっ！まったくいつもひどい目に遭わせやがる。」鍵司の頭には巨大な絆創膏が貼つてある。「いててて……。」

「鍵司、そんな言い方ないで。ピーチ姫は命の恩人や。」

「何で桃子が命の恩人なんだ？」

「ピーチ姫がおれへんかったら……。」

「桃子がいたからどうだって言うんだよ。」

「……。」駿平は続ける言葉をなくして引きつり笑いを浮かべていた。

「まあ、いいさ。みんな無事だったんだからな。桃子、気にすんなよ。ありや不測の事態だったんだからよ。」

「本当にごめんなさいね。」

「……。」気持ち悪いな。いつものようにぼんぼんぽーんと跳ね返つてくれなきゃ調子狂うじゃねえか。」

「あほっ！ピーチ姫の気持ちも考えてやらんかい！」

「わかったよ。悪かった。俺も。桃子こないだは俺が悪かった。煮るなと焼くなと好きなようにしていいぜ。」

桃子は顔を上げて久しぶりに笑顔を見せた。「キー坊……。」

「これで謝つたつもりなんやろな。まったく依怙地なやつちゃ。」  
駿平はため息をついた。

「とにかく、桃子がどうしてあんな所にいたか。言えよ。」

「実はね、キー坊たちが持ってた設計図のコピーはダミーだったのよ。」

「なにい？ダミーだと？」

「そうやるな、全然違つとつたもんな、あの通路。」

「ううむ……。敵もさる者。巧妙に罠を仕掛けてきやがる。」  
「そやけど、なんでそれがピーチ姫にわかるんや？」  
「ゆうべパパがもう一つの設計図を持ってきてくれてね。」  
「もう一つの設計図やて？」  
「同じ封筒に入ってたのよ。」  
「がくっ！」  
「な、なんで気づかなかったんだ！」  
「だ、だって、一つの封筒に二つ入ってたって同じ物だと思わないじゃない。」  
「なるほど。ま、そういうもんだな。」  
「でね、その二つの間にいっぱい食い違いがあるのに気づいてキー坊に知らせなきゃ、と思ったわけ。」  
「俺たちがあの水責め通路に忍び込んだこと、よくわかったな。」  
「あなたたちの行動パターンはお見通しよ。」  
「なんだと？」  
「5つの抜け道のうちで、キー坊が一番に狙うのは女子更衣室だつてわかるわよ。誰でも。」  
「ばっ！ばか言え！俺はそんなにスケベじゃねえ！」  
「そお？でも、二人つきりであんなに暗いところで妙なことを考えてなかったでしようね？」  
「ばっ、ばかな！な、な、なんで男同志でそんなこと・・・」  
「そ、そや、ピーチ姫、な、な、何にもあれへんかったって。」  
「何慌ててんのよ。二人とも。怪しいわね。まさかあんたたちデキてんじゃない？」  
「かつ、かつ、からかうのもいい加減にしろっ！」「鍵司はあのことを思い出して卒倒しそうだった。」  
「冗談よ、冗談。ごめんごめん。でも二人とも真つ赤よ。キー坊も意外に純情なのね。」  
「おまえにはわからんよ。男の複雑な気持ちがな。」「鍵司は目を閉じて呼吸を整えるのに必死だった。」

「はいはい。」

鍵司と駿平は顔を見合わせて、すぐに赤面してうつ向いた。

「そうそう、本物の設計図によるとね、あの水責めの通路は結局あっちこっちの裏道が最終的に合流する本流みたいなものなのよ。」

「本流？じゃあ、プールの女子更衣室の反対側はやっぱり体育館のステージの下に出るんだな？」

「そう。」

「しかし、あんな大量の水を流し込んだらあっちこっちの裏道にも影響があるんじゃないか？」

「体育館側の出口には目張りがしてあったな、そう言えば。」

「たぶん防水するために、相当な気密構造になってたんでしょ？」

「おそらくはな。」

「考えてみれば……」

「何だよ、駿平、急に。」

「俺と鍵司、結局無駄なことやったんとちゃうか？」

「確かにやみくもではあったわね。だいたい、あんな通路に忍び込んでどうしようと思ってたの？キー坊。」

「どうだったって……」

「おおかた女子更衣室目当てだったんでしょ？」

桃子がまたむし返した。

「ち、違わい。もしかしたら何か掴めるんじゃないかと思ったんじゃないか。」

「で、結局敵さんに悟られて水責めに遭ったってわけね。お間抜けなこと。」

「悪かったな。」

鍵司もあとの二人もあの時本当に死にそうになったので、彼もいつものように強力に反論することができなかった。

「それでもコインを二つも見つけたで。」

「え？本当？」

「いや、三つだ。」

「なんや、いつの間に見つけたんや？鍵司。」

「これだ。」鍵司はテーブルに置かれた、壊れた噴水から持ってきた、頭の取れてしまった亀の像をひっくり返した。

「ほんまや！」

「なんで亀のお腹なんか・・・」

「福祿寿やて？」

「そうか、亀を連れてる神様ね。」

「これで6つ揃ったことになるわね。」

「あと一つか・・・」

「7つ揃うと何か起こるのかしら？」

「ありがちな話だな。」

「ロールプレイングゲームみたいやな。」

「よし、桃子、大事に持つてる。」鍵司はコインを桃子にまた押しつけて、話をごまかしにかかった。「さて、俺たちが秘かに侵入したがっていることは権堂校長は気づいた。」

「そんなん。最初に森の井戸から入った時に気づいとるがな。」

「そ、そうだ。とすれば知られたくないことは隠すか、俺たちを消しにかかるか、つてとこじゃないか？」

「両方やと思うで。おそろく。」

「桃子の執念深さは玄海鮫子が知っているだろうしな。」

「なによ。その執念深さっていうのは。」

「違うって言うのかよ。」

「とにかく、さっさと片づけたいのよ、この事件。」

「同感やな。」

「わかった。このへんで俺たちのやることはつきりさせようぜ。」

「その一、放射線による権堂力造の計画的な生徒の脳改造の証拠を手に入れる。」

「まったく恐ろしいおやじだぜ。」

「その二、放射線発生装置を解体する。」  
「そりゃ桃子の担当だ。」  
「何だよ。」  
「おまえモノ壊すの得意だろ?」  
「返す返す失礼な男ねあんた。」  
「当面そんなだけかいな?」  
「それで十分よ。命を奪うまでは考えてないわ。」  
「本当にそれで復讐になるのか?桃子。」  
「・・・十分よ。」  
「へえ、結構おまえ人間できてんな。」  
「慈愛に満ちた聖母マリアって呼んで。」  
「けっ!」

「どうするかね?権堂校長。」  
「あいつらめ、まったく執念深い。」  
「おぬしの計画を知られては・・・」  
「消すしかあるまい?ネズミたちをな。」  
「消す・・・?」  
「口を封じる別の手があるのかな?灰駄先生。」  
「殺人は何かとリスクが・・・。そこでじゃ、」  
「そこで?」権堂力造は身を乗り出した。  
「あの装置を使えばやつらの記憶を消すことも。」  
「ほう、そんなことが・・・。おもしろいではないか。」  
「すべての記憶が消えてしまう。もしかすると自分が誰であるかも忘れてしまいかもしれぬぞ。」  
「なに、構わん。命があるだけありがたいと思ってもらうことにしようではないか。ふっふっふ・・・。」  
「では、操作方法をお教えしよう。」  
「なんだ、あんたは手を下さんのか?」  
「わしももうこのようによぼよぼのじいじじゃ。いつお迎えがき

ておぬしの計画を妨げるかもしれない。」

「またそのような。」

「いやいや本当じゃ。わしとて自分の考案した機械を他人に操作されるよりは自分でやった方がいいに決まっとる。じゃが、こればかりはおぬしの考え通りに事が運ばねば意味のないことじゃ。そうじゃろ？」

「確かに・・・そうではあるが・・・。」

「大丈夫じゃ。大した知識はいらぬ。」

「いや、わしはよくわからん。鮫子に教えてもらえんかね？」

「そうかな？」

「信用してもよいぞ。あの女はな。」

「わかった。では彼女に操作方法を覚えておくとしよう。」灰駄は口元にほとんど気づかれぬほどの笑みを浮かべた。「ところで、すぐに真顔に戻って灰駄は言った。「そろそろ清算してもらえんか？」

「清算？」

「そうじゃ。あの装置の設置、それにコントロール・プログラム作成、あとは技術料というところかの。」

「よかるう。約束では3000万だったかな？」

「すぐに支払ってもらえるのなら2800万にまけてやるぞ。」

「いいのか？」

「おぬしの腹はわしもよく知つとる。」にたりとその老人は笑った。

「足元を見られたものだな。まあいい、すぐに小切手を用意しよう。」

「すまんの。」

「その代わり、急いでくれんかね？灰駄先生。きやつら、すぐにも忍び込むと思つてよい。」

「それではさっそくそのように準備することにしようかの。」

「この学校に近づいたらわしがここまでおびき寄せせる。今度侵入

を試みた日がやつらの最後の思い出の日になるのだ。うははははは。

権堂校長の横で灰駄は不気味な声なき笑いをかみ殺した。

### 三 対決『乾坤一擲』

誰にも気付かれないうちに梅雨が明けてしまった。いつもと変わらない、とてもよい天気である。

「な、なんやねんこの格好は！」

宝船高校のグラウンドが見渡せる森の中に三人は潜んでいた。

「落ち着け、駿平。白昼堂々学校に侵入するととなると、変装するしかあるまい？」

「そ、それにしてもなんで俺がセーラー服着らなあかんねん！」

「人に気づかれないうちにするにはなるべく実際とかけ離れた格好をする必要があるんだよ。」

「似合うわよ、とつても。駿ちゃんて、本当にかわいいわ。キー坊、ちよつとクラクラつてきちゃうんじゃない？」桃子は普通の制服を着て、頬に詰め物をして眉を太くしてロングヘアのカツラをかぶっている。「ねえ、女装した駿ちゃんて男が見ても十分かわいいわよね。」

「と、とにかく、一般生徒になりすまして侵入を試みるんだ。いいな。」

「なら、なんで鍵司は変装せえへんねん。」

「そりゃあおまえ、もし俺がセーラー服着たら、」

「変態そのものよね。」

「そ、そつだ。」鍵司はしぶしぶ認めた。「だからおれは別行動をとることにする。」

「別行動？」

「グラウンドの体育用具室に忍び込んで抜け穴から例の放射線発生装置の部屋まで行く。」鍵司の手には桃子が作った強力な爆薬が握られている。「桃子、もう一度聞くんが・・・」

「なあに？キー坊。」

「この爆薬、本当に安全なんだろうな？」

「安全な爆薬なんかあるわけないでしょ。でも大丈夫、相当強い衝撃を与えない限り爆発しないから。手から落としたりぐらいじゃ何も起こらないわ。」

「絶対だな？」

「んもう、キー坊ってほんとに小心者なんだから。」

「おまえを信用してないだけだ。」

「大丈夫だったら。じゃ、あたしたちは放射線計画の証拠書類を捜しに行くわね。」

「くれぐれも無理すんなよ。正体がバレそうになったら何をおいても逃げるんだぞ、いいな。」

「心配してくれてありがと。さ、行きましょ、駿ちゃん。」

「氣い進まんなあ・・・。」駿平は桃子から借りた眼鏡をかけたグラウンドを堂々と横切って手をつないで駆けて行く二人の後ろ姿を見送りながら、鍵司は軽い嫉妬を覚えた。え？嫉妬？いったいどっちにだろう。

「お、俺いったい何考えてんだ？」

体育用具室に忍び込むのは極めて容易だった。入口の鍵はかかっていなかったからである。それがかえって不気味だった。

「おれたちの行動、見透かしてるって感じだぜ・・・。」

そして積み上げられた石灰の袋の棚の一部に仕掛がしてあるのもすぐにわかった。

「いかにも、さあ入ってこいって言うてるようで・・・。」

棚の脇の床にはつくりと口を開けたのが、設計図に書かれている抜け道の穴であるのは明白だった。鍵司はおそろおそろ地下に降りるコンクリートの階段に足を向けた。

「もじゃ、」階段を下りながら鍵司は付近の壁を調べた。「やっぱりだ。」

そして彼はプールの女子更衣室や体育館の秘密の入口と同じように隠されている最後のコインを見つけた。

「7つ目のコインだ。」

それには布袋の文字と絵が彫られていた。

「ついに全部そろったぞ。」

鍵司は狭いコンクリートの階段で小躍りしたが、ふと動作を止めると低くつぶやいた。「だからなんだってんだ？」

しげしげとそのコインを見つめながら彼は続けた。「いつたい、このコインの意味は何なんだろうな。まったく・・・。」

ぶつぶつ・・・。彼は階段を下りて通路をたどり始めた。地下はひんやりとしてやはり先に行くほど暗くなる。当然懐中電灯を持ってるのでその灯を頼りに彼は敵の陣地に向かって歩いて行った。

仲のよい二人の女子生徒は、堂々と生徒昇降口から校舎内に入り込んだ。そして職員室の方に極当り前を装って歩き出した。すれ違った二人組の男子生徒が少し怪訝な顔つきで振り返った。

「おい、あんな女、この学校にいたっけか？」

「・・・さあな。」

二人の男子生徒は立ち止まった。

「でもよ、」

「ん？」

「あの、眼鏡の女、なかなかかわいいじゃん？」

「・・・俺もそう思ってたんだ。」

「楊 桃子も顔負けってところだな。」

「まったく。この学校の美女のトップの座、完全にあの眼鏡の女に奪われたな。」

「楊もなかなかかわいいと思っていたが・・・。」

「性格が災いしてるよな。」

「確かに。」

「それにひきかえ、あの娘なかなかおとなしそうだし。」

「なんかぞくぞくするほどかわいいな。」

「何年生だろうな。」

「クラス知りてえな。」

「後をつけてみるか？」

「ああ、そうしようぜ。」二人は見慣れぬ女子生徒の二人組をつけ始めた。

駿平は桃子にささやいた。「ピーチ姫、誰かつけて来てるで。」

「気づかれたのかしら？」

「どうやら三年生らしい。」

「何の用なのかしら……。」

「どうする？このまま……」駿平が桃子に言いかけた時、桃子はくるりと振り返って、その三年生の男性生徒をにらみつけた。

「何か用なの？」

「あ、い、いや、えっと……。」

口ごもったその男子生徒Aを後ろに追いやってもう一人の三年生Bが言った。

「君たち、どこのクラスなんだい？」

「やばい！」駿平は桃子に身を隠した。

「そんなこと聞いてどうするつもりなの？」桃子は腰に手をあてて二人を威嚇した。

「なに、できれば話をしたいな、と思ってさ。その後ろに隠れる子と。」

駿平は正体をばらされるのを恐れて桃子の背中に隠れていたが、どうやらそれが初々しい恥ずかしがり屋の女の子と受け取られたらしかった。

「ね、いいだろ？」

「あんたたち、この子をナンパしようなんて10年早いわ。おととい来なさい。」

「そ、そんなこと言わないでさあ。」Bは無理やり桃子の腕を掴んだ。

「な、何すんのよ！離してよ！」

その時、反射的に駿平はBの胸ぐらを掴んで、無言のままビシバ

シと往復平手打ちを浴びせた。Bがひるんで桃子の腕を離れたとたん、桃子と駿平は手を取り合つてすたこら駆けて逃げて行った。

「ぼーぜん……。AもBもその場に立ちすくみ、ぼかんと口を開けて桃子たちの駆けて行った方を焦点の定まらない眼付きで見続けていた。」

「ねえ、君、何ていう名前？」

「見慣れないけど、どこから来たの？」

「かわいいね。俺とつき合わないか？」

桃子たちが校長室に近づくまでにつごう3人の男子生徒が、変装した駿平に別々に声をかけてきた。その度に桃子はだんだんと不機嫌になった。

「なんで本物の女に声をかけないのかしらっ！」「ぶんぶん。」

「あかん、このままやと、ほんまにばれてまう。」

「そういう問題じゃないでしょ。駿ちゃんがこんな男の子にモテるなんて思わなかったわ。」

「そういう問題やあれへんて。はよ証拠を探さな。」

「そうね。」無愛想に桃子は答えた。やっと二人は校長室の前に立っていた。

急に駿平は手を叩いて言った。「そや、ピーチ姫、ちよっとわいやボ用があんねん。ここで待っててや。すぐ戻るさかいな。」

「ちよ、ちよっと、駿ちゃん、どこ行くのよ！」

桃子の制止にもかかわらず、駿平はもうすでに二階に通じる階段を駆け昇り始めていた。

ずいぶんと長い距離を歩いて、やっと鍵司は放射線室のドアらしきものの前にやってきた。途中に餌は皆無だった。それもまた不気

味だった。

「森の井戸から入ったところとは違うドアだな・・・。」鍵司は恐る恐るそのドアのノブに手をかけた。電気が流れているわけでもなさそうである。そしてガチャリ。ドアはあっけなく開いた。むやみに重い鉛色のドアだった。鍵司はその暗い部屋に足を踏み入れた。人の気配はない。懐中電灯でわりと大胆にその部屋を調べ始めた。教室の4倍ほどの広い正方形の空間である。壁も天井も床もすべて赤銅色に磨き上げられている。鍵司の手の懐中電灯の光はその壁に当たり、不気味に赤い光に変化してあたりを浮かび上がらせた。

今入ってきたドアのある壁にもう一つドアがある。鍵司はそれが森の井戸につながる通路に出るためのドアであることを悟った。そしてドアを背にして左側の壁にはなにやら複雑なコードやスイッチがやたらとたくさんついた大型の黒い機械が据え付けてあった。そしてその機械の正反対の壁、すなわち今鍵司がいる所から見て右側の側面にも鉛色をしたドアが一つついていた。

「異様な部屋だぜ・・・。」

鍵司は部屋の中央に進んだ。なぜか床の中央に直径2mほどの銀色の円盤が取り付けてあった。

「何だ？こりゃ。」

その時、何者かが鍵司の背後から襲いかかり、彼の口にひんやりとした布を当てがった。

「むぐ、むぐぐ！」鍵司は抵抗したが、すぐにあっけなく気を失ってしまった。

コンコン！「どうぞ。」部屋の中からの声の主を確認して駿平は生徒会室のドアを開けた。権堂妖子は変装した駿平の姿を上から下までじろじろと観察した。

「誰？見慣れない生徒ね。」

駿平は後ろ手にドアを閉めた。見たところこの部屋にはその体格のいい生徒会長以外には誰もいないようだった。

駿平は、無言でテーブルにあつた紙切れになにやら書くと、げんな顔でその様子を見ていた権堂妖子に、それを手渡した。権堂妖子はその走り書きに目をやった。「何が起こつても大声をだすな。ですつて？あなたいったい・・・。」

「俺や。」駿平はかつらと眼鏡を外した。

「き、君は！」妖子は立ち上がった。

「心配せんでもええ。あんたを脅そうなんて思とれへん。」

「速水駿平？」

「そや、訳あつてこんなカツコしとるけど、落ち着いて話、聞いてくれへんか？」

「いいわ。」妖子は座り直した。駿平もそこにあつた椅子に腰掛けた。

「あんた、権堂校長が何やつとんのか、知ってるな？」

「・・・。」

「隠す必要ないで。俺たち調べあげてん。やつの企み。放射線のことな。校舎の設計図も持つとるんやで。」

「私にどうしろと？君たちの要求は？」

「やから、脅しやない、言うとるやる。」

「君たちは退学した身。もう関わりあわなくてもいいんじゃないの？」

「俺たちはな、自分さえ無事ならここで何が起こつても知らんぶりしよう、と思えんぐらいにいろんなこと知つてしもたんや。おとなしゅうしとるわけにはいかんねん。」

「権堂校長に正体がバレたら怪我するぐらいじゃ済まないわよ。」

「承知の上や。」

「私は敵なのよ？」

「それも承知の上や。」

「ずいぶん大胆なこと・・・。」

「あんた、生徒会長や。去年全校生徒の選挙で選ばれたんや。それ、忘れたとは言わさんで。」

「き、急に何を・・・」

「あんたが生徒会長になれば学校に安心して登校できる思とる一年生や、あんたを教師集団と対等に渡り合えるリーダーや思とる二年生が投票したはずや。そやる？」

「・・・・・・・・」

「あんたが裏で校長の手助けして動いとるなんて、みんなに知れたらおおごとやで。」駿平は妖子の目から片時も視線をはずすことなく続けた。「それに、あんた自身の良心が痛めへんか？」

「良心・・・」

「あんたは腐りきったこの学校の教師集団より、もっと俺たちに近いはずや。違うか？」

駿平は立ち上がった。

「いつか言おう思ててん。あんたがどう思おうと、俺は言いたいこと言ったから気は済んだ。ほな。」

「速水くん・・・」妖子も立ち上がった。

「校長に密告するならしてもええで。」

「待つて！」妖子の伸ばした右手の指の格好がいびつであることに駿平は気づいた。彼は立ち止まった。

「あんた、右手どないしてん。」

はつとして妖子は右手を引つ込めた。

「ピアノ、弾けんようになった理由があるな？」

「き、君には関係ないわ。」

「そうか、ほな。人待たせとるさかい。さいなら。」駿平はカツラと眼鏡を元通りにつけ直すと、ドアを開けてさっさと出て行った。

「んもう！何やってんのかしら、駿ちゃん。」桃子はイライラしてうろろろしていた。

「いやあ、待たせてしもたな。ピーチ姫。」

階段を早足で降りてきた駿平は桃子の肩を軽くたたいた。

「誰かとデートの約束？」桃子は皮肉たっぷりに言った。

「いや、ふられてしもたわ。」

「ほ、本当？」桃子は驚いて聞き返した。

「それはさておき、どうするんや？ピーチ姫。」

桃子は眉間にしわを寄せた。「駿ちゃん……」

「ええからええから。気にせんといてや。」

さて、二人は校長室のドアが見える廊下で他愛もない立ち話をしているどこにてもいる女子生徒のふりをして立っていた。校長室に権堂力造の企んでいる放射線悪用に関する証拠がある確たる根拠はなかった。だが変装した桃子と駿平は何というか、校長に対する仕返し of 気持ちもあつて、つい足が最初にこの部屋の方向に向いてしまふというのが正直な話だった。だから彼らは今ここにいるのだった。

「私の計算では……」桃子が腕時計に目をやった。「やがて掃除の時間よ。」

「その時に忍び込むわけやな。」

そしてすぐに、

キンコン。

チャイムが鳴った。しばらくして校内放送がおよそ掃除には不釣合いなA・ビバルデイのBGMに乗って掃除開始を告げた。

「今よ！駿ちゃん。」

ドアをノックするのもそこそこに、それっ！と二人は校長室に飛び込んだ。もしかしたら、中で校長が何か人に見られてはまずいことをやっているかもしれないという期待があつたからだ。こうなったら、どんな校長の行動でも怪しいものは追求してやろうという二人の、特に桃子の執念深い魂胆だった。が、あいにく校長は不在だった。

「金庫がないわね。」

二人は校長室を丹念に調べ始めた。もちろん誰かに見られた時のために桃子はモップ、駿平は柄の長いほうきを手に持っていた。

「爆破されたあと、撤去されたんと違うか？」

「たぶんね。」

駿平は大きな黒いレーザーのソファの下をのぞいてみた。

「ほんまにここに放射線悪用の証拠があるんかいな。」

「何でもいいから探すのよっ！」

桃子は校長の机の引出しをかき回し始めていた。

「そない派手に散らかしたら、あからさまに怪しいで。」

だが桃子は聞く耳を持たなかった。

駿平の心配はしかし現実にならずにすんだ。桃子がひとしきり机の中を引っかき回した結果、どうにか証拠になる書類を見つけたからである。それは講師灰駄の臨時採用決定通知書の写しだった。それにはクリップで別添の2つの書類もいっしょにされていた。一つは灰駄の放射線力学の専門的な実績と実験結果の一覧表。もう一つはある特定のプログラムされた放射線が人間の脳に及ぼす活性効果及びそのリスクについての論文だった。

「ラッキーだわ。こんな有力証拠が見つかるなんて。」桃子は小躍りした。だが、駿平は比較的冷静である。

「そりゃ、これで灰駄が放射線で危ないことやっとるってことはわかったで、そやけど、ここ荒した時に残るピーチ姫の指紋のことや、盗んだ書類で犯罪を立証できるかどうかまで考えとんのか？」

「……………」

「そこ、片づけた方がええんちゃうか？」

わたわた！桃子はあわてて校長の机を片付け始めた。

「元に戻せば、何とかなるかしら？」

「ほんまに元通りにできるんどうかが問題やな。」桃子に手を貸しながら駿平は悲観的に言った。

幸運としか言いようがなかった。彼らが校長室の中をどうにか元通りにするまで誰もその部屋をのぞくものはいなかったからである。少なくとも校長自身が机を開けなければ、誰かがここを物色したことなくわかるはずもなかった。もともと桃子たちは校長にチェックされているので、指紋が出たところであり趨勢すうせいに変化はないと言

つてよい。将来的にはこの校長を懲らしめることができる、と二人、特に桃子は信じて疑わなかった。そうなれば、今自分たちがやったような軽い犯罪行為など取るに足りないものであると彼女は確信していた。が、駿平は桃子のそんな自信がどこから来るのか、どうしても理解できなかった。

校長室を後にした二人は、何くわぬ顔で元来た道を引き返し始めた。

「キー坊うまくやったかしら？」

「捕まらんとええんやけどな。」

生徒昇降口にやってきて、靴を履こうとした時に、背後から甲高い声がした。

「あー、その二人。」

振り向いた桃子と駿平は思わず絶句して硬直した。何と、権堂力造校長である。

「今からどこに行くのかね？もうすぐ授業が始まるんだが。」

「え？あ、い、いや、ちょ、ちょっと先生を探しに……」

「誰をかね？」

「あ、あの、げ、玄海先生です。そ、外においでではないのかなーなんて思っちゃって。あはは……」

「ああ、玄海先生なら今、校長室におられる。わしといっしょに行こうじゃないか。」

「え？い、いや、べ、べつに大した用事ではなくて、その……」

「そう言わずに、さあ、来たまえ。」

権堂校長は無言を言わず二人を校長室に連行した。

「ど、どないすねん、ピーチ姫っ！」校長の後ろを歩きながら駿平は桃子に小声で言った。

「ごまかし通すのよ。」

不気味な音を立てて校長室の入口が閉められた。

「そのソファに座りたまえ。」

校長に促されて二人はしぶしぶ腰を下ろした。

「え、えつと・・・玄海先生は・・・」

「私はここよ。」

彼らの背後から声がした。そして彼女は二人の前に移動し、テーブルをはさんで向き合った。

「私に何か用だったの？楊さん、速水くん。」

「げげっ！」

「ばれたっ！」

「ふん！しょせん頭の悪い中国娘。きさまらの考えること、やることなどわしらのレベルではない。蠅螂の斧とはきさまらのことを言うのだ。」

「ど、どうして私たちの本当の姿を見破ったの？」

駿平に対してごまかし通せと言っていた桃子本人が、自分の正体をばらしている。しょうがないか、そういう性格だ。

「説明するまでもないが、」校長が身を乗り出した。「ここできさまらがやったことは全部見られておったのだ。ばかめ。」

そうか、あらゆる部屋に掛けてある校長の怪しい肖像画のことをすっかり忘れていた。

「手口からしておまえらであることは疑う余地もない。変装としては見事なものだな。特に速水駿平。」

「・・・」駿平は屈辱感が高まった。

「見慣れぬ二人の女子生徒が十数人の男子生徒を殴り倒して逃げたという情報が届かんとでも思ったのか？それに、」校長は薄気味悪い笑みを浮かべて続けた。「その内の一人はこの学校でもトップクラスの美女だというではないか。怪しく思われんはずはなからう？どうだ。」

「な、なんでやねん。」

「この学校の女子生徒に美女などおらん。わしはそう確信している。」

な、なんて失礼極まりない奴だ！と二人は思った。だが、今、彼

らが立たされている窮地を脱するチャンスもきっかけも可能性もないことをもまた二人は思い知らされていた。

「好いたようにしたらええやないか。」

「そうか。それでは遠慮なくそうさせてもらうぞ。だが、いつも仲のいい小川にも会いたいだろう？」

「えっ?!」

「心配するな。処分する時は三人いつしよだ。ふふ、ふはははは。権堂力造はきたならしい目つきで二人を見て笑うと片側だけの頬の筋肉をピクつかせて嘲るように続けた。「もはやきさまらは罪人午後からの全校弁論大会できさまらの悪行を全校生徒に報告し、警察沙汰にしてやる。どうだ?大人の知恵にはかなわんのだ。思い知ったか。」

「く、くっそー!」

「今すぐに楽にしてあげるわ。」鮫子が二人に近づいた。

「やっぱりグルやってんな!」

「あなたたちに気付かれてることなんて、先刻ご承知よ。」ふふん。と鼻をならす鮫子を見て、駿平はこの女の醜悪さを思い知った。授業の時や、自分たちに協力すると見せかけていた時の表情とはまるで別人である。歯ぎしりで彼の顔は真っ赤になった。

「知っていたいながら、何の手も出せないでいたのね。つくづく愚鈍な高校生だこと。」

文句を言い返す間も与えられることなく、二人は玄海鮫子にクロ口ホルムを嗅がされてしまった。

桃子は自分のかつらをむしり取られ、懐の書類も取り上げられるのを感じた。そして校長室の角の隠し扉から、秘密の通路を誰か体格のいい教師に担がれて運ばれるのを感じた。

『どこに連れて行かれるのかしら・・・』

秘密の通路はほとんど真っ暗だったが、先頭を歩く者が照らす懐中電灯の明りでほんのりあたりの様子を探ることができた。

『あの放射線装置のある部屋だわ!』桃子は身動きせずにとそう直感した。彼女の直感の外れたことがない。

ロープで縛られた状態でその広い部屋に転がされた。すぐそばに鍵司がやはり気を失ったままで倒れているのを桃子は知った。

「こいつらどうします?」

「ふふん、どうせ逃げられはせん。そうだな? 玄海先生。」

「まず気がつくことはないわね。」

「弁論大会が終わってゆっくり料理することにしよう。」

校長たちが部屋を出て行くのを確認した後、桃子は身体を起こそうと激しく暴れた。すると、最初からゆるかったロープがほどけてあっさりと自由を取り戻した。

「ちょっと、起きて、駿ちゃん!」桃子は駿平を揺さぶった。が、彼は愛らしい寝顔で気を失ったままである。

「キー坊! しっかりしなさいよっ!」鍵司も起きなかつた。それならせめてロープぐらいほどいてやればいいものを、桃子は男たちをほったらかしにして、プールの女子更衣室につながるドアを開けてその部屋を出て行った。全く薄情な女である。

桃子の頭にはもう校舎の表と裏の通路の全てがインプットされていた。彼女は裏の通路を注意深く進んで調理室にやってきた。そうして調味料の入っている棚からコシヨウの小瓶を取り出して鍵司たちのいる部屋に戻った。そうしてまず鍵司の鼻に、それから駿平の鼻にも持ってきたコシヨウをしこたま振りかけた。

「ぶ、ぶ、ぶえつくしよんっ!」

「よかつた、気がついたのね!」

「桃子っ! は、は、はぶしっ! 早くロープ、ほどけよっ!」

「わかつたわよ。慌てないで。」桃子は鍵司のロープを解いた。そして駿平のそれも。

「ピーチ姫、おおきに。へ、へ、へぶしよっ!」

「駿ちゃんもキー坊も、ほら、これで。」桃子はポケットティッシュを取り出して二人に与えた。

「まったく、ひでえことするな。桃子。」鼻をぐずぐず言わせながら鍵司は悪態をついた。「もつとマシな気付け薬、なかったのかよっ！」

「そんな物持ち歩かないわよ。」

「爆弾は持ち歩くのにか？」

「クロロホルム嗅がされた時にはこれが一番効くのよ。」

「ほんまかいな。」

「じゃあ、なんでおまえ平気なんだよ！」

「馬鹿にしないでちょうだいね。あたしを誰だと思ってるのよ。」

泣く子も黙る大化学者、楊 桃子さまよ。」

「化学者だからどうだってんだ？」

「クロロホルムなんて平気のへっちゃんよ。もうあたしには効かないわ。」

「そ、それも実験の賜物か？」

「そうよ。何度実験用うさぎと一緒に気絶したか。あんたたちは知らないでしょうね。」

「あほかいつ！」

「それはそうと、これからどないするんや？」やっと駿平がまともな意見を出してきた。だが、少し遅かった。

「どうすることもできんな。」

「校長！」

「い、いつの間につ！」

彼らの背後に権堂力造、玄海鮫子が立っていた。

駿平がとつさに行動を開始した。三人の教師に飛びかかったのである。だが、どやどやと入ってきた体育の教師たち5名に取り押さえられた。

「や、やろう！」鍵司も刃向かおうとしたが、無駄だった。柔道の教師にあっさり寝技に持ち込まれ、床に組み伏せられた。桃子は校長が手を下した。そして彼らは黒い放射線発生装置の反対側の壁に縛りつけられた。

「危うく逃げられるところだった。今すぐ処分してくれる。」校長はそう言つと用意してあった物々しいアルミスーツのようなものを着て部屋の中央の円盤の上に立った。

「な、何しようってんだ？」

権堂校長と放射線発生装置のコントロールをするらしいコンピュータのモニターに向かつて座つた玄海鮫子だけを残してあとの教師はあわてて部屋から出て行つた。

「何が始まるんや？」

「きさまらの息の根を止めるのは簡単だが、少し楽しませてもらうぞ。」

ジャラララッ。三人の両手首を束縛していた鎖がゆるんだ。が、ゆるんだだけで、壁とつながつたままである。桃子たちは今、手錠をして壁から最大5mほどの範囲で自由に動ける状態である。

「さて、楽しい鬼ごっこを始めるか。」

権堂校長は不敵な笑いを浮かべて三人に向かつて右手を伸ばした。その途端、彼の指先から青白い稲妻がほとばしり出て、駿平をかすめて背後の壁に突き刺さつた。

「危ねえっ！」鍵司が叫んだ。

「ふっふっふ、逃げまどうがいい！」

バシッ！次々に襲いかかる電撃を、三人は命がけでかわした。

「ど、どうなってんねん！」

「あれは耐電スーツよ。そして床が電極。壁も帯電してるわ！」

「すると、やつが、」バシッ！「指を向けた方に放電するわけだな。」鍵司は息を切らして電撃を避ける。「剣呑なやつぢやな！」

「そうだわ！」桃子が叫んだ。そして駿平に走り寄つた。彼女は駿平にすばやく耳打ちした。「あのバケツを校長に向かつて蹴り飛ばせる？」

「バケツ？」

何の意図があつてか知らないが、彼らが繋がれている壁の端、つまり部屋の角に『防火用』と赤い字で書かれたブリキのバケツが置

いてあった。

「場違いやな。」

「いいから、早くっ！」

「よっしゃ、いくで！」バシッ！バシッ！次々に襲いかかる稲妻を避けながら駿平は信じられないスピードでそのバケツに駆け寄ると、校長に向かつて蹴り飛ばした。見事なコントロールで校長の足を直撃したそのバケツは、その時に中の水をぶちまけ、校長の耐電スーツの足元をぐっしよりと濡らした。

「ぐおおおおお！」

権堂力造は痙攣し始めた。

「は、早く電気を切ってくれ！」

慌てた玄海鮫子が何かスイッチをいじると校長の痙攣は収まった。

「よ、よくもやりおったな。」

「ばーかばーか。変なこと考えるからよ。なにファミコンゲームのボス気取ってんのよ。べーだ。」

「こ、こらっ！桃子、刺激すんじゃねえ。」鍵司が言った。だが、桃子はやめなかった。「水が電導体だってこと知らないあんたはばかよ。へへーんだ。」

そういう桃子の悪態を聞き終えた後で、駿平は言った。「事態は一向に好転しとれへんで。」

そうだ。単に権堂校長の怒りに油を注いただけである。好転どころか、三人はいよいよピンチにさらされることになるわけだ。

「こしゃくな真似をしておって！」アルミスーツを脱ぎ終わった校長の目は怒りに燃えていた。当り前である。

「たった今、きさまらの記憶を消してやる！」

「な、何だっつて！」

「き、記憶を?!」

「玄海先生、頼みますよ。」

権堂力造の右腕玄海鮫子はコントロール盤のスイッチに手を伸ばした。ウィーン……。かすかだが地獄の底から響いてくるような

不気味なうなりが聞こえ始めた。そしてほのかに青白い光が天井からスポットライトのように桃子に降り注いだ。

「一人ずつ楽しませてもらおう。まずはその中国娘からだ。ふっふっふ……ふはははは！」

権堂力造は部屋のまん中に仁王立ちになったまま高らかに笑った。

「や、やめろーっ！」鍵司が叫んだ。しかし、その直後、ジャラン……。突然桃子ががっくりと声も立てずに床に倒れ込んだ。

「桃子！」

「ピーチ姫！」

二人は桃子に駆け寄った。彼女は気を失っている。

「きつさまー！桃子に！よくも！」鍵司は真っ赤な顔で身体を震わせた。「ゆ、許さねえ！」

ぐぐぐっ！鍵司は腕に力を込めて壁につながれた鎖を引っ張った。

「うおおおおお！」がちゃん！鍵司の鎖は二本とも途中で引きちぎれた。

「な、なにっ！」権堂は後ずさりした。

餃子にスイッチを押させる暇も与えず、鍵司は桃子と駿平の鎖も引きちぎってしまった。火事場のバカ力である。

ひょんひょんひょん！鍵司は腕についたままの鎖を振り回し始めた。そして権堂に迫った。「こっ！殺してやる！」

「こ、こらっ！危ない！やめろ！」権堂は逃げまどった。

「危ないだと？！桃子を元通りにしろ！今すぐだ！」

ぶーん、ばしっ！「うあっ！」鍵司の振り回す鎖が権堂の足を直撃した。そしてその悪の校長はぶざまな格好で床に転がった。ひょんひょんひょん！それでも鍵司は攻撃の手をゆるめることなく権堂に迫った。「殺してやる！きさまなんか！」

「や、やめてくれ！た、頼む！」権堂は悲鳴を上げた。

「鍵司！やめるんや！鍵司！」駿平が叫んだ。

「ええい！構うな、駿平！」鍵司の目は怒りに燃えている。

「権堂が憎いのんはわかる。わかるけど、今はやめとき。」駿平

が振り回される鎖の間をぬって鍵司を後ろから捕まえた。

「離せ！桃子のかたきをとるんだ！」鍵司は抵抗した。

「あかん、あかんて、そないリスク。よう考えてんか。」

セーラー服姿の駿平は鍵司を後ろから抱きしめた。

どん！鍵司の心臓がときめいた。ガララ……。そして振り回していた腕をだらりと下ろした。すでに権堂力造は恐怖のためか気絶していた。

「しゅ、駿平……。」

「今はピーチ姫のこと、」

「……………」

鍵司は無言のままコントロールパネルの所で恐怖におびえている玄海に、鎖を引きずってつかつかと歩み寄った。その化学の教師は青ざめている。

「わ、わ、わたしは権堂校長に命令されて……。」

「やかましい！」鍵司が大声を出すと鮫子は口をつぐんだ。「桃子を元通りにしろ！」

「そや、記憶を元に戻すんや！」

「そ、そんなことは……できないわ。」鮫子は右足を気づかれないように移動させた。

「なんだと?!この期に及んでまだ逆らうつもりか！」

「ち、ち、違うわ!そ、そんな方法は、」そこまで言った時、玄海鮫子は床に大きく開いた穴に身を躍らせた。そして次の瞬間その床は元通りになった。

「な、なんやて?!」

「し、しまった!逃げられた!後を追って……。」

「待ちいや鍵司、とにかく今はピーチ姫を休ませんと……。」

「くっそー、覚えてる!」そう言いながら鍵司はそこに落ちていた鍵で駿平と自分の手かせを外すと、その鎖で気絶したままの権堂力造を縛り上げた。そして急いで桃子の所に駆け寄り、彼女の鎖も外した。「桃子……桃子……。」鍵司の目から涙がこぼれた。

鍵司は優しく桃子を抱き起こした。「記憶が戻らなくても、俺が、俺がずっといつしよにいてやる。」そして彼女を抱きしめた。

駿平は二人の様子をうなだれて見ていた。彼は桃子の足がもぞもぞと動くのを見た。「あ、ピーチ姫気が付いたみたいやで。」

「なにっ?!おい、桃子!」

桃子の閉じられた目から涙がにじみでた。

「しっかりしろ!桃子っ!」

「キー坊?」ぱかっ!桃子の大きな目が開かれた。

「おおっ!鍵司のこと覚えとるで!」駿平が歓声を上げた。

「気が付いたか、桃子!」

鍵司は桃子の肩を揺さぶった。

「キー坊!」桃子は叫んで鍵司にしがみついた。

「速水くん、小川くん。」

不意に聞こえたドスの効いた女性の声。鍵司たちはとっさに声のする方を見た。その巨大な女は体育館からの秘密の通路を通って来たドアを開けた状態で叫んだのだった。

「あつ!権堂妖子!」鍵司が叫んだ。「どうしてお前が!」

鍵司の問いかけに答えもせず権堂妖子は鎖で縛り上げられた自分の実の父親を見おろした。そして振り向いて後ろに立っていた男に声をかけた。「青木くん頼んだわよ。」

青木草男は今まで玄海鮫子のいた椅子に座るとパソコンのキーを目まぐるしいスピードでたたき始めた。

「か、会長、データはどうします?」

「そこらへんのUSBメモリか何か記録するのよ。」

「わかりましたっ!」

「な、なんでおまえたちが・・・」

驚く鍵司に向かって妖子はにっこり笑って言った。

「後でゆっくりお話ししよう。」

「お話だと?」

「そう、今度は純粋な麦茶をごちそうするわ。」

「わかってくれたんやな、権堂妖子……。」

「速水くん、さつき言えなかったことがあるの。」

「え？」

「セーラー服がよくお似合いよ。」

「な……。」

ほんのり赤くなつてますます魅力的になつた駿平に、妖子は少し羨望の眼差しを送つた。

「さて、クラスの代表者は中に入ってちょうだい。」

妖子が叫ぶと、彼女が入ってきたドアから学校の全てのクラスの代表者がこわごわ様子を見ながら放射線発生装置の部屋に入つてきた。

「どう、これが校長の陰謀の証拠。これであなたたちの脳に細工をしようとしていたのよ。」

どよどよ。生徒たちはざわついた。「私たちは騙されていたのよ。学校の名誉のために私たちは実験室のハムスターのように使い捨てられていくところだったの。」

鍵司はちらりと桃子を見た。桃子の目はまだ虚ろである。

「でも、ここにいる小川鍵司くん、速水駿平くん、楊 桃蘭さんのおかげでこいつらの陰謀を潰すことができたのよ。今まで私たちが思い込まされていた彼らとは違う。とても勇敢な生徒なの。」妖子は生徒会長らしいよく通る声でそこに集つたクラスの代表者たちに語りかけた。

「どよどよ……。」その生徒たちのどよどよの中身の一部分が鍵司に聞こえてきた。「あれが速水駿平だと？」「信じらんない！」「す、すると、俺が声をかけたのはやつだったのか？」「げげーっ！」「かわいいっ！」「女としてもやってけるわね、駿平。」「きやーきやー。」

「……。」駿平は言葉もなく立ちすくんだ。

「権堂妖子……おまえ……。」

妖子は鍵司たちの方を向いた。

「さっきの弁論大会で私が全校生徒に全てを説明してきたわ。」  
「全て・・・って？」

「権堂校長のやってきたこと全てよ。」

「お、おまえいつの間になんか善人になったんだ？」

「とつてもかわいらしい女子生徒に諭されたのよね。」  
「そういつて妖子は駿平にウインクした。」

「あなたたちはもういいわ。」

「どよどよ・・・。クラスの代表者たちはぞろぞろと去って行った。」

妖子はいつものチャーミングな笑みを浮かべて言った。

「どうもありがとう。大変だったわね。」

「妖子さん・・・」  
「桃子はつぶやいた。」

「おい、桃子、おまえ権堂妖子のこと覚えてるのか？」

「なんや、いつもと変わらんや、様子が。」

「桃子、おまえ、ひよつとして・・・」  
鍵司は桃子を抱いていた腕の力を緩めた。

「え？何のこと？」  
「ぱんぱん。桃子は服のほこりをはたいて立ち上がった。」

「げ、元気そうやな・・・。」

「記憶喪失になったんじゃないのか？」

「あの程度の放射線にやられる桃子さんじゃあないわ。」

「す、すると、おまえ・・・。」

「ゼーんぶ覚えてるわ。心配してくれてありがとう。キー坊大好きよ。」  
「桃子は鍵司にまた抱きついた。」

「こっ、こっ、こいつはっ！」  
鍵司は赤面した。

「つくづく丈夫な身体やな。ピーチ姫。」

妖子は目を細めて彼らを見た。「あとは警察と教育委員会に任せ。私たちができることはここまでよ。」  
「そして妖子は次に青木に目をやった。」  
「どう、青木くん、データはとれた？」

「そ、それが・・・。」

「どうしたの？」

「はい、会長。このデータ、全部ダミーです。」

「ダミーですって?!」

「これじゃあ、この機械をコントロールするどころか、電源を入れたり切ったりすることもできませんよ。」

「ど、どういふことなの?」

鍵司はつかつかと放射線発生装置に歩み寄った。そしてその複雑なランプ、ゲージ、レバーやスイッチにまみれた物々しい機械を見上げると、手で軽くたたいてみた。

ぼこぼこ・・・。

「ぼこぼこ? やっぱりこれ青木が言ったようにただのはりぼてじやねえのか?」

「キー坊、あんた私の爆弾まだ持つてる?」

「え? ああ、持つてるけど。」

「貸して。」そう言うと、桃子は鍵司の返事も聞かずに無理やり彼のポケットに手を突っ込んで、その手榴弾に似たものを取り出した。

「みんな下がってちょうだい。確かめるわ。」そう言うが早いか、彼女は数歩下がってそこにいる人々の安全の確認もせずにおもむろにその巨大な装置に手の中のを投げつけた。

「ばっ、ばか! やめんか!」鍵司が叫んだが、遅かった。

どごーん!

部屋に煙が充満した。

「げほげほ!」

「あほかい!」

「見て! キー坊、駿ちゃん。」桃子はすでに破壊された装置のところに立っている。

「むっ! こ、これは!」

「鉄板の残骸!」

「キー坊の推測は正しかったのね。レバーもランプもみんな飾りだったのよ。」

「むむむ・・・だ、騙された・・・」

「あつ！権堂校長！気が付きおつた！」

「灰駄め・・・」

鍵司は床に座り込んで上体を起こした校長に近づいた。

「どうやら、きさまの企みもバブルだったようだな。」

「・・・わしは・・・」

「もう諦めな。初めっから放射線だの記憶操作だのの仕掛はなかったんだよ。きさまが灰駄や玄海を信用したのが運の尽きだったつてわけだ。」

「まさに玩物喪志つてとこね。」

権堂校長はがっくりとうなだれた。

「そうだ、校長、7つの金色のコインの秘密を教えてくださいませんか？」

「コイン？ああ、あの七福神のコインのことか・・・」

「いったい何だ？ありゃあ。」

「わしの心のお守りだったのだ。」

「お守りだあ？なにかわいらしいこと言ってんだ。」

「君たちは知らないだろうが、わしは今までの人生で自分のやることがうまくいったことがなかった。」

「てめえのその性格のせいだろうが。」

「そう言われても返す言葉はない。」

桃子と駿平、それに妖子も権堂校長を取り囲んで立った。

「昔からわが家に伝わる家宝なのだ。その7つのコインはな。」

「で？」

「自分が一番大切にしている場所にそれを置けば、そこからかならず運が開ける、という言伝えがあるのだ。」

「へえ。ずいぶん迷信深いやつだな。」

「厄払いのつもりだった・・・。」

「厄払いだあ？」

じゃら・・・。7枚揃ったそのコインを桃子は自分の手に広げた。

「悪夢を葬りたかったのだ……。」

「何だよ、その悪夢ってのは。」

権堂は何も言わずにうつ向いた。

「大切な場所ねえ……。それで秘密の入口にそれを隠してたつてわけか。」

「森の中に福祿寿、体育館の毘沙門天、プールの恵比寿、噴水の寿老人、体育倉庫の布袋、やったな。確か。」

「あと二つあるわよ。弁財天と大黒天。」

「……。パパ。」今まで黙っていた妖子が口を開いた。

「そうか、妖子さんが持ってたんだ、この大黒天のコイン。」桃子はそのコインをつまみ上げた。

「この弁天さんは？」

「私の……。弾いてたピアノなの。」妖子がぼつりと言った。

「な、何だと?!」

「こ、この学校のピアノがか？」

「私が指に怪我して、ピアノが弾けない身体になったから、学校に寄付したの。」

「怪我？だと？」

「右手の小指。手術したけど、もう動かない。」妖子は父親を抱き起こした。

「妖子……。」

「パパ……。もう終わりにしましょう。」

「一番大切に行っている場所……。か。」鍵司がため息をついた。

「お返しするわ。権堂校長。」桃子は権堂力造の手を広げ、持っていた7枚のコイン全てを握らせた。

「桃子くん……。」

「今度はきつと運が開けるわよ。いい娘さんもいるしね。」

「好運を運んで来てくれたのは……。君たちだったのかもしれないな……。」力造はまたうなだれた。

桃子たち三人は壊れた中庭の噴水から表に出た。

「桃子、おまえの復讐はこれで終わりってことでいいのか？」

「……………」

「まさか、ここを校長もろとも爆破しまおうなんて考えてたんじゃねえだろうな？」

桃子はため息をついた。「なんだか・疲れちゃった。」

「同感やな。」

少しの沈黙の後、鍵司が再び口を開いた。

「帰ろうぜ。」

「そやな。」

「待つて。」桃子が立ち止まって言った。

「どうしたんだ？」

「学校のピアノで鍵司の演奏聞きたいなっ。」

「なにぶってんだよ。」

「だって、しばらく聴いてないし、この学校にももう二度と来られなくなっちゃうし。」

「そんなのどかなことやってもええんか？ピーチ姫傷だらけやで。」

「大丈夫よ。」

「桃子、おまえのその『大丈夫』の根拠、どこにあるんだ？」

「え？」

「ま、丈夫な桃子のこった。確かに大丈夫だろ。行こうぜ。」鍵司は先頭に立って歩き出した。「このピアノも弾きおさめか。」

音楽室は夏の陽の光が容赦なく窓から差し込んで、いつものように異様に暑苦しかった。鍵司はピアノの蓋を開けた。

「ちよつと指馴らしするぜ。」

「いいわ。待つてる。」

桃子は駿平といっしょに窓際に立っていた。鍵司の指が鍵盤上で遊び始めた。

「ねえ、駿ちゃん。」

「なんや？ピーチ姫。」

「眼鏡返して。」

「ああ、そうやったな、すまんすまん。」駿平はかけていた桃子の眼鏡を手渡した。そしてかつらも外した。

「女つて夏は暑うてかなわんな。」そう言いながら胸の詰め物も取り出した。「しもた、着替え持って来んのわすれとった。」

「外に出る時はまた変装しなきゃね。」

「かなわんなー。」駿平はセーラー服のスカートをばたばたした。

「それより、ねえ、駿ちゃん。」

「なんや？」

「あなた留学する気はない？」

「留学やて？」

「そう。スポーツ留学でノルウエーの大学が待ってるわ。」

「待ってる・・・って？」

「私の家の奨学生制度なの。」

「ピーチ姫んちの？」

「そ、『楊建設北欧留学生募集』のお知らせ。」

「募集つつても・・・。」

「学業や芸術、スポーツを生涯のものとして研究する意欲ある若者を対象に募集してるの。」

「知らなかった・・・。」

「今年から募集することにしたんだけど、3人分先に押さえてあるのよ。」

「3人分？」

「そうよ。あなたと私とキー坊の分。」

「ほんまの話か？それ。」

「私は嘘は言わないわ。」

「やけど、おふくろに相談せんと・・・。」

「もうパパから話してあるわ。彼女も賛成してる。」

「え？」

「お母さんもいつしよに駿ちゃんとおむこうで暮らせる用意はできてるわ。」

「そ、そこまで世話になるわけには……」

「駿ちゃん二人暮しだから、一人で行っちゃつとお母さん寂しがるわよ。」

「……話、してみるわ。おふくると。」

「そうね。それが一番ね。早めに知らせてね。」

「おおきに、ピーチ姫。」

「おい、桃子、何が聴きたい？」鍵司が振り向いた。

「決まってるじゃない。あれよ。」

「あれか。」鍵司は一度深呼吸をして静かに『春のさざめき』を弾き始めた。桃子も駿平も目を閉じて聴いた。

「やつとゆつくり茶が飲めるな。」

「ほんまやな。」

「最高の烏龍茶を入れてあげるわね。」

「なんじゃい、その最高の烏龍茶つてのは。」

「中国福建省特別限定生産の庶民には滅多に手に入らない貴重品よ。その筋では金観音茶つて呼ばれてる。」

「金観音茶なあ？」

「ほんまかいな。」

「いちいちうるさいわね。文句言わずに飲みなさいよ。」桃子は二人の前にカップを置いた。

「ところで、あのコイン金ピカだったが、ありゃ本物の金だったのか？」

「重かつたから私も最初はそう思った。ところが、」

「違つてたんか？」

「じゃあ、値打ちのねえただの……」

「あれね、私こっさり計測してみたの。」

「計測？」

「そうよ。化学者の血が騒いでね。」

「まーた始まった。」

「コイン一枚の質量は20・163?重、その体積0・95で割ると、21・22。これは1立方?あたりの重さ、つまり比重ね。」

「純金の比重は19・3だから、それより重いつてこと。」

「で、結局、」

「比重21・45に極めて近い。あれはプラチナのコインだったの。表面に金メッキが施してあつたつてわけ。」

「へえ。プラチナ。」

「昨日の新聞で調べたら今のプラチナの相場は1?あたり1532円だから、コイン一枚30889円。7枚でなんと216・223円の値打ちがあるのよ。」

「すげえな。」

「プラチナは純金より高価だつて知つてた？」

「ほんまかいな。」

「一にぎりだ21万円か。」

「こんこん、がちゃ。その時、桃子の父親がノックと同時に部屋に乱入した。」

「パパ、ノックぐらいしてよね。」

「したではないか。」

「私、入ってもいいなんて言つてないわよ。」

「今入つてはいかんとでも言いたげだな。」

「何言つてるの。常識よ常識。」

「おまえから常識云々されるとは思わなんだな。」

「また喧嘩売る気？」

「さて、わしの調べた所によると、」ばふっ！桃子の父親はソファに腰を下ろした。びよん！座つていた駿平が30?ほど飛び上がった。

「何よ、いきなり。」

「黙って聞け。おまえらの知りたいたらうことを調べてきてやったのだ。」

「パパじゃないでしょ？木村のおばちゃんでしょ？」

「ええい、水を差すな。」

鍵司と駿平は笑い合った。

「どうやら権堂家の悲劇は三年前の中国旅行の時に起こったらしいのだ。」

「な、何よその中国旅行って。」

「うむ。この近辺の私学協会の会長を権堂力造がやっておった時にな、協会の主催で中国を視察旅行に行ったのだ。」

「パパも？」

「わしは都合で行けなかったが、旅行の企画は全部わしが立てた。」

「ということは、おやつさんはその時から宝船高校の理事をやってたってわけだ。」

「うむ。それでな、丁度旧日本軍の従軍慰安婦だったという人たちとの会見をしている時に、一人の中国人の男から襲われたのだ。」

「襲われた？」

「そうだ。両親を旧日本軍に殺され、妹は慰安婦として屈辱を受けたという男だった。本人もずっと捕虜として強制労働を強いられていたという。まだおまえたちぐらいの年齢の時にだ。」

「……………」

「わかるな。その気持ち……」鍵司が暗い表情で言った。

「その時に父親をかばった妖子は、男の持っていたナイフで右手の小指を切断する怪我を負った。」

「せ、切断？」

「中学生でありながら、県のコンクールにも入賞する実力を持っていた娘だった。ベートーベンの重さと豪快さを見事に表現する女子中学生とは思えぬ怪物、と称されていた。」

「えらいな褒め言葉やな……………」

「あ、俺知ってるぞ。」

「キー坊、そのコンクールに出たの？」

「俺はコンクールが嫌いだって言っただろ？」

「じゃあなんで知ってるのよ。」

「その筋じゃ有名な話さ。そうか、あの女がああ時の……。」

「かわいそうに、彼女の小指はつながりはしたが、元には戻らなかった。」

「なるほど。」

「これで氷解だな。」

「学校のピアノがベートーベンに向いていること、権堂校長が中国人を恨んでいる訳。」

「でも、なんで中国人のおっちゃんがそのまま理事でいられてん？」

「理事などというのはな、駿平、金を持っているだけでよいのだ。」

「金を？」

「おそらく、権堂もわしを好んではいなかったはずだ。だが、この町で学校を経営していくのに、わしの権力と財力が無視できなかつたのだからな。」

「パパに権力なんてあつたっけ？」

「ばかめ、権力なんぞ、そう簡単にひけらかすものではない。金と同じだ。必要な時には必要なだけ惜しみなく使う。それも人さまのためにな。そうでなければただの極悪人に過ぎん。」

「さつすがピーチ姫のとうちゃんや。」

「俺、初めておやつさんを尊敬しちゃったぜ。」

「思い知ったか。」えっへん！桃子の父親は不必要にふんぞり返つた。「わしが自分のことしか考えん平凡な権力者なら、今ごろ政治家になつとるわい。」

「政治家に？」

「おうさ。きょうびの政治家は選挙のことしか頭にない、金の使

い道を知らん。世間の人さまに選ばれたという自覚もないではないか。」

「たしかにおっちゃんの言う通りやな。」

「だからおまえらには金を使うのだ。」

「ありがとう。パパ。」

「将来のある若者にこそ金とチャンスを与えるべきなのだ。」

「俺、いつか必ず恩返しします。」

「おえ、気持ち悪い。鍵司そんな口の利き方はやめろ。それにな、おまえらに恩返しを期待なぞしとらん。好きにしてこい。金はいくらでもある。安心せい。その代わりに、」

「え？」

「必ずでかくなつて帰つてこい。期限は3年だ。」

こうして秋から鍵司はフィンランドのヘルシンキ大学の留学生として、駿平は母親といっしょにノルウエーのオスロに、そして桃子自身はスウェーデンのストックホルムの大学に化学の研究生として留学していくことになったのだった。

桃子の父親は「あとは若いもんに任せて、わしは退散するか。」とわけのわからないことを言つて出て行つた。

「桃子がスウェーデンに行くもう一つの理由を教える。」  
烏龍茶をすすりながら鍵司が尋ねた。

「あたしがスウェーデンに行く本当の訳はね、日本にはまだ実現しそつにない社会福祉の実態を見てみたいからなのよ。」

「難しいこと言つてんな。」

「日本は物質面では豊かかもしれないけど、精神面にゆとりがない。そう思わない？」

「思う思う。」駿平が言った。

「一生安心して暮らす、人々が支え合つて、ゆつくり生活することを考えてみたいの。あたし。」

「日本って、確かに慌ただしいよな。」

「それに、社会福祉が行き届いているにも関わらず自殺率が高い

とか、環境に敏感なはずなのに原子力発電所が多いとか、結構矛盾もあるのよね。あたし、昔から北欧びいきだから、自分で真相を確かめてみたいのよ。」

「なるほどな。」

桃子は今度は鍵司の顔を見て言った。「森と湖の国、だったわよね、フィンランドって。」

「そうさ。フィンランド人は自分の国をスオミの国って言うんだと。」鍵司は烏龍茶をぐいと飲み干した。

「スオミ？なんやねん、それ。」

「湖っていう意味なんだ。湖がフィンランドの誇りとも言えるかもな。なんせその数6万だぜ、6万。」

「いいわね。二人で夕暮れの湖畔で過ごすなんて……。」

「二人？俺が誰と……。」

「にぶいやつちやな。ピーチ姫に決つとるやろ。おんなじ北欧に行くねんで？」

「そしてキー坊は私を抱き寄せ、優しくキスしてくれるの。」桃子は指を組んで夢みがちな瞳を輝かせた。

「なっ！な、なにが優しくキスだ！」

「『記憶が戻らなくても、俺がずっといつしよにいてやる。』そして私の体を抱きしめた……。あれは偽りだったの？」桃子は鍵司を横目で見た。

「そ……。」

「おお、赤くなつとる。かわいいやつちや。」

「うるせえ！」

「神秘的な北極圏・ラップランド……その夕暮れのイナリ湖畔が二人のファーストキスの場所なんだからね。ちゃんとついておいてよ。」

「ファーストキスなあ？」鍵司は硬直した。テーブルのティカップが倒れた。

「なに？その驚き方。ひょっとしてもうファーストキス済ませた

の？」

「ばっ！ばかな！」

「怪しいわね。キー坊つてば奥手で私以外に女っ気ないと思っただのに……。駿ちゃんは知ってるの？キー坊のファーストキスの相手。」

「そ、そんな話、き、き、聞いたことないで。だ、大丈夫や。た、た、たぶん鍵司はまだ……」

「なに？どうしたの？駿ちゃんまで赤くなっちゃって。もしかして……」

鍵司はあわてて桃子の言葉を遮った。「わかった、桃子、フィンランドの湖畔で待ってる。待ってるからな。ちゃ、ちゃんと来るんだぞ。」

「変なの。」

桃子は鍵司のカップを立て直して、ポットから再び熱い茶を注いだ。

- 劇終 -

### 三 対決『乾坤一擲』（後書き）

『春のさざめき』・・・ノルウエーの作曲家クリスティアン・シン  
ディング（1856～1941）の作曲したピアノ曲作品32の3。  
北欧の厳しい冬を乗り越えた人々の喜びを繊細かつ快活に表現した  
佳曲。

最後まで読んでいただき感謝します。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4935s/>

---

爆弾的娘

2011年4月22日12時54分発行